



3972



114
A1397



大藏大輔井上馨同三等出仕遊澤栄一

奏議

國家ノ隆替ハ固ヨリ氣運ノ然ラシムル處ト
雖凡亦未タ政府举措ノ當否ニ由スニハ非ル
ナリ維新ヨリ以來未タ十年ナラスニテ庶績
緒ニ就キ萬方化ニ嚮ヒ内ニハ數百年既ニ衰
ヘタルノ紀綱ヲ恢弘シ外ニハ五大洲方ニ盛
ニナレノ政刑ヲ折衷シ封建ヲ變シテ以テ郡
縣ヲ定メ門閭ヲ廢シテ以テ賢材ヲ舉ケ律ハ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

萬國ノ公法ヲ兼子議ハ四境ノ輿論ヲ盡シ学
ハ八區ヲ別ケテ無智ノ民ヲ誘ヒ兵ハ六鎮ヲ
置テ不逞ノ徒ヲ懲ス一瞬遠キニ達スルハ舟
車同ク蒸氣ノ力ヲ藉リ萬里急ヲ報スルハ海
陸並ニ電信ノ機ヲ頼ム心ヲ貿易ニ用ヒ力ヲ
開拓ニ盡シ其他造幣製鐵燈臺鐵路ヨリ以テ
街衢道路屋舎衣帽几床ノ細ニ至ルマテ日ニ
憂シ月ニ革マリ駸々乎トシテ開化ノ域ニ進
ム丁駟馬モ及フ可ラサレノ勢アリ此ノ如シ
シテ已マサレハ數年ヲ出テスシテ文明ノ具

備スル丁之ヲ歐米諸國ニ比スルモ亦當ニ慙
色ナカルヘキナリ苟モ國家ニ志アルモノ皆
喜ニテ相慶スルヲ知レリ然リ而メ臣等ハ憂
ニ憂フル所アリ蓋シ憂ハ憂ニ終ハルニ非ラ
ス必ヤ喜アリテ其間ニ存シ喜ハ喜ニ終ルニ
非ス必ヤ憂アリテ其中ニ存ス故ニ憂アレハ
其喜フ可キモノヲ求メ喜アレハ其憂フヘキ
モノヲ慮カル是ニ於テ好^好举措當ヲ失ハスシ
テ國家以テ開明ノ真治ヲ致スヲ得ニ夫レ開
明ノ言タル其稱ハ一ナリトイヘ凡推シテ其

歸スル處ヲ論スレハ判然岐ツテニツト為サ
ルヲ得ス開明ノ政理上ヲ主トスルハ形ヲ
以テスルモノニシテ開明ノ民力上ヲ重ニス
ルハ實ヲ以テスルモノナリ形ヲ以テスルモ
ノハ求メ易クシテ實ヲ以テスルモノハ致シ
難シ今歐米諸國ハ民皆實學ヲ務メテ智識ニ
優ナリ故ニ人々各自其力ニ食ム能ハサルヲ
以テ大耻トナシテ我民ハ則チ之ニ反ス士ハ
徒ニ父祖ノ穀祿ニ藉ルヲ知テ未タ文武ノ科
ヲ究ムルヲ知ラス農ハ徒ニ郷士ノ常ニ仍ル

ヲ知テ未タ耕桑ノ術ヲ講スルヲ知ラス工ハ
徒ニ傭作ノ價ヲ論スルヲ知テ未タ器械ノ巧
ヲ求ルヲ知ラス商ハ徒ニ錙銖ノ利ヲ争フヲ
知テ未タ貿易ノ法ヲ明ニスルヲ知ラス是皆
其力ニ食ム能ハサルモノニシテ實際一二才
識ヲ以テ稱セラルモノアリトイハル多ク
ハ皆請托機ニ投シ壟斷利ヲ罔スルノ徒ニ過
キス甚シキハ欺詐百出誣冒万憂産ヲ破リ家
ヲ七クニ至ルモノ比々トシテ之アリ今斯ノ
如キノ輩ヲ驅テ一朝俄カニ之ヲ開明ノ域ニ

届ラシメント欲ス亦猶卵ヲ見テ時夜ヲ求ム
ルカヤキ也臣等曾テ中夜竊ニ自ラ謂フ長ク
大都ニ在テ一タヒ海外ニ航シ職ヲ奉スル久
シカラストセス事ヲ閱スル多カラストセサ
レハ其智識昔日ニ愈ルヤ必セリト退而其長
スル所ノ者ヲ求ムレハ依然タル吳下ノ阿蒙
ノミ因テ起坐大息スル者之ヲ久フス臣等ノ
遇フ所ヲ以テシテ猶且然リ況ンヤ生レテ偏
境僻邑ニ在ル者ニ於テクヤ是ニ由テ之ヲ觀
レハ今日ノ開明ハ民力上ヲ重ニスル者ニ非

スシテ徒ニ政理上ニ空馳スル者固ヨリ智者
ヲ俟テ後ニ知ラサル也苟モ政理上ノミヲ主
トセン乎人々愛國ノ情ヲ存スレハ誰カ敢テ
文明ノ政治政術諸國ノ如クナルヲ企望セサ
ル者アラニヤ是ヲ以テ現今在官ノ士且未タ
其地ヲ踏マス目未タ其事ヲ見ス僅ニ之ヲ譯
書ニ窺ヒ之ヲ寫真ニ閱スルモ亦且ツ奮然興
起シテ之ト相抗セントス況ヤ比年海外ニ客
遊スル者ニ於テクヤ其歸ルニ及ニテハ或ハ
英ヲ以テ優ビリトシ或ハ佛ヲ以テ勝レタリ

トシ蘭ヤ米ヤ赤ヤ澳ヤ皆其長スル所ヲ以テ
我ニ比較シ街衢貨幣開拓交易ニ論ナク兵ニ
学ニ議ニ律ニ蒸氣傳信ニ衣服器械ニ凡ソ以
テ我カ文明ヲ資クハキ者纖毫遺サス細大漏
サス以テ我具備ヲ求メサルナキニ至ラニ是
固ヨリ人情ノ止ムヲ得サル所ナシテ未ダ以
テ非トナス可ラスト雖也徒ニ其形ノミヲ主
トシテ其實ヲ重^{注意}ヒセスニハ政治遂ニ人民ト
背馳シ法制益美ニシテ人民益疲レ百度愈張
テ國力愈減シ功未タ成ニ至ラスシテ國既ニ

貧弱ニ陥リ善者アリト雖也其後ヲ善クスル
能ハサラントス果シテ此ノ如キ也其レ何ヲ
以テ國タル事ヲ得ニヤ是入々ノ喜フ所ニ
テ臣等ノ以テ憂フル所ナリ凡ソ天下ノ事ハ
預メ標準ヲ高遠ニ期セサルハカラスト雖モ
其手ヲ下スニ方テハ則チ歩々序ヲ逐ヒ着々
実ヲ認メ政理ヲシテ民カト相負カサラシム
ルヲ要ス決シテ躁行輕進速成ヲ一日ニ求ム
ヘカラス武臣均キヲトルノ日ハ國各其制ヲ
異ニスト雖也人ヲ舉ル必ス門閥ヲ以テス是

故ニ位ニ在ル者ハ肉食ノ徒ニ止リテ政刑却
テ卑^盡賤吏ノ手ニ出ツルニ由リ教化法律ノ
何物タルヲ知ラス故キヲ按シ例ニ據リ武断
決ヲ取ルヲ以テ事却テ苟簡ニシテ未タ紛擾
ノ患ヲ見^知ス因襲ノ久シキ民モ亦視テ以テ常
トナシテ敢テ之ヲ異シム者アレドナク海内
又安茲ニ二百餘年一旦外交ノ事起ルニ及テ
其害始メテ大ニ見ハレ取捨スヘカラサルニ
至レリ尔来志士仁人^群争^衆起^衆競^衆趨^衆其身ヲ殺シテ
以テ維新ノ運ヲ挽回^セルヲ得タリ是時ニ當

テハ其勢ハ舊弊ヲ掃除シ庶政ヲ更張シテ天
下ノ耳目ヲ一洗セサルハカラス是ヲ以テ先
ツ視聽ヲ廣ムルヲ求ム既ニ視聽ヲ廣ムルヲ
求ムレハ^其故常ニ安ニスルヲ耻ルヲ知ル既ニ
故常ニ安ニスルヲ耻ツルヲ知レハ猛省勇決
昔日ノ弊^癩ヲ蕩盡セサル^ヲ能^得ハス是ニ於テ乎倒
行逆施^癩奉テ其事ニ從ヒ凡ソ國體兵制刑律教
法学則工術民法高業ヨリ百般ノ技藝ニ至ル
マテ之ヲ一時ニ更革シテ以テ萬國ト抗衡セ
ント欲ス是氣運ノ然^ヲシムル所ト雖^凡其奉

措モ亦此ニ出スニハアヲサル也之ヲ良醫ノ
疾ヲ治ルニ譬フ疾方ニ劇ナルニ當テハ先ツ
投スルニ劇劑ヲ以テセサルハカラスト雖モ
其漸ク平カナルニ迄テハ温補ノ藥ヲ與ヘテ
以テ其元氣ノ復スルヲ待ツ是レ之ヲ其術ヲ
得タリト謂フ故ニ良醫ノ期スル所ハ唯元氣
ノ復スルヲ待ツニアツテ必ス先ツ投スルニ
劇劑ヲ以テス天下ヲ為スノ術モ亦何ヲ此ニ
異ナラニヤ既ニ投スルニ劇劑ヲ以テシテ其疾
漸ク平カナルヲ致シ庶績緒ニ就キ萬方化ニ

嚮フ是宜ク温補ノ藥ヲ與フヘキノ時ナリ故
ニ今日政府ノ事ヲ施設スル歩々序ヲ逐ヒ着
々実ヲ認ムルヲ要シテ未タ計此ニ出ルヲ知
ラス猶疇昔ノ輕佻ニ倣ヒ徒ラニ百事ノ躁進
ヲ勉ム是臣等ノ今日ニ甘心スル能ハサル所
ナリ然リ而シテ其コレヲ致スモノ臣等固ヨリ
其由来スル所ヲ知レリ更始ノ際政府專ラ人
才ヲ擇拔スルニ急ニシテ天下ノ人士モ亦自
ラ奮テ其用ニ供セント欲ス苟モ一藝ヲ挾ミ
一能ニ誇ルモノ雲集簞至身ヲ闕下ニ致スヲ

顔ハサル者ナクシテ昔時糶鹽ノ節ニ從フ者
或ハ其材ナシト雖凡遠ニ捨ツ可カラス今日
操觚ノ才ニ名アル者或ハ其學アリト雖凡長
ク棄ツハカラス是ヲ以テ野ニ陞ホス可キノ
士アリテ朝ニ斥ク可キノ人ナク百官ノ闕ル
ナキ未タ此時ヨリ盛ナルハアササル也夫官
其人多ケレハ必ス其事ヲ作コスヲ好ム既ニ
其事ヲ作コスヲ好メハ必ス其功ヲ成フヲ喜
フ今政府意ヲ民力上ニ注意セシテ力ヲ政
理上ニ專ニシ百官又事ヲ作コシ功ヲ成スニ

急ナレハ勢ヒ實用ヲ捨テ空理ニ馳スルノ弊
ナキ能ハス况ヤ愛國ノ至情ヨリ彼ノ開明ノ
政治ヲ欽羨シテ驟ニ之ト相抗衡セント欲ス
ルニ於テヲヤ是ニ於テ力唯事務ノ振興ヲ務
メテ治具ノ漏飲アラニテ之レ恐ル故ニ害
トシテ陳セサルナク利トシテ講セサルナク
或ハ隙ニ投シテ以テ容ルヲ求ムル者アリ
或ハ新ヲ銜フテ寵ヲ要スルモノアリ院省使
寮司ヨリ府縣ニ至ルマテ各自ラ其功ヲ貪テ
往々其官ヲ増ス是ヲ以テ百事湊合万緒蝟集

互ニ相抵觸ニテ政府モ亦自ラ其弊ニ堪サラ
ントス且夫レ其官アレハ其給ナカルハカラ
ス其事アレハ其費ナカルハカラス是故ニ事
務日ニ多キヲ加ヘテ用度月ニ費ヲ増シ歳入
常ニ歳出ヲ償フ能ハサレハ之ヲ人民ニ徵求
セサルヲ得ス夫レ政治ノ要其端固ヨリ多シ
トイハレ洵號ノ今日ニ際セル須ラク理財ヲ
以テ第一義トスハシ苟モ理財法ヲ失セハ要
費給スルヲ得ハカラズ要費給スルヲ得ハカ
ラサレハ百事何ヲ以テ奉カルヲ得ニヤ是ニ

於テ乃チ之カ賦稅ヲ増シ之カ傭役ヲ起シテ
以テ斯民ヲ督呵ス其極斯民ヲシテ安息セシ
ムル能ハスシテ國モ亦随ツテ凋衰ヲ免レサ
ラシムルニ至ラシ是古今ノ通患ニシテ政府
ノ深ク寒心セサルハカラサルモノ實ニ此ニ
アリ今全國歳入ノ總額ヲ概算スレハ四千萬
圓ヲ得ルニ過キスミテ豫シメ本年ノ經費ヲ
推計スルニ一變故ナカウシムルモ尚五千萬
圓ニ及フハシ然ラハ則チ一歳ノ出入ヲ比較
シテ既ニ一千万圓ノ不足ヲ生ス加之維新以

來國用ノ急ナルヲ以テ毎歳負フ所ノ用途モ
亦將ニ一千万圓ニ超ヘントス其他官省田藩
ノ楮幣及中外ノ負債ヲ舉クルニ殆ント一億
二千萬圓ノ巨額ニ近カ、ラントス故ニ之ヲ
通算セハ政府現今ノ負債實ニ一億四千萬圓
ニシテ償却ノ道未ク立サル者トナス然則速
ク其制ヲ設ケテ逐次之ヲ支消セサルヘカラ
ス然ラスレハ後來人心ノ信憑ヲ固確スル能
ハスレテ一朝不虞ノ憂アル困頓跋扈臆ヲ啞
ムル及フヘカラサルニ至ラニ然リ而シテ政

府未ク意ヲ此ニ注セス却テ百度ノ更張ヲ勉
メ開明ヲ政理上ニ求ムルヲ猶前日ノ如クナ
ラハ斯民ヲ保護スルノ道安クニカ在ル政府
既ニ斯民ヲ保護スルノ道ヲ得ス斯民其レ何
ヲ以テ蘓息スルヲ得ニヤ議者乃チ曰ク瘠土
ノ民ハ勞シ沃土ノ民ハ樂ム樂メハ貧ニシテ
勞スレハ富ム故ニ其智ヲ進メテ之ヲ富マサ
ント欲セハ其賦稅ヲ厚クスル速カニ歐米諸
國ノ如クセサル可ラスト噫何ソ其言ノ謬レ
ルヤ欧米諸國ノ民タル梘子智識ニ優ニシテ

特立ノ志操ヲ存ス且其國體ノ然ラシムル所
ヨリ常ニ政府ノ議ニ參スルヲ以テ其相保持
スル猶手互ノ頭目ヲ護スルカ如クナレハ利
害得失内ニ明ニシテ政府ハ唯之カ外延タル
ニ過キス今我民ハ則此ニ異リ久シク專擅ノ
餘習ニ慣レ長ク偏僻ノ固陋ニ安シ智識開ケ
ス志操確カラス進退俯仰只政府ノ命ニ之レ
導ヒ所謂權利義務ノ如キニ至ツテハ未タ其
何物タルヲ辨スル能ハス政府令スル所アレ
ハ國ヲ奉テ之ヲ奉ヒ政府趣ク處アレハ國ヲ

舉テ之ニ歸シ凡風習語言服飾器什ヨリ日用
翫具ニ至ルマテ先ヲ爭ヒ後ルヲ恐レテ政
府ノ好尚ニ摸セサル者ナシ夫レ好ム所下焉
ヨリ甚シキアリ故ニ互市ノ際ニ於ルモ彼ノ
器物翫什ヲ輸入スルノ常ニ多クシテ輸出ノ
品ハ僅ニ十ノ六七ニ居ルニ過キス民安ニテ
其貧弱ニ陷ル日一日ヨリ甚シカラサルヲ得
ニヤ古人言アリ曰ク民ヲ視ル傷ムカ如シト
今ヤ政府ノ斯民ヲ視ル壺ニ傷ムカ如キ能ハ
サルノミナラサル也却テ之ヲ法制ニ束縛シ

之ヲ賦税ニ督呵スル或ハ昔日ニ加フルアリ
編戶籍ナキヲ得ス氏社證ナキヲ得ス宅地券
ナキヲ得ス人血税ナキヲ得スシテ訴訟ノ費
アリ違註ノ罰アリ物貨販品牛馬婢僕ニ至ル
マテ皆其律ナクシハアラス是ヲ以テ一令下
ル毎ニ輒々斯民罔然措ヲ失シ其嚮フ所ヲ知
ラス商ニ就テ得サレハ工ニ就キ工ニ就テ得
サレハ農ニ就キ家ヲ破リ産ヲ失フ者比々相
踵ク其凋衰ニ赴ク者モ亦昔日ニ倍スルアリ
夫レ此ノ如キナリ政府ハ愈歩ヲ開明ノ域ニ

進メテ民ハ愈陋ヲ野蠻ノ俗ニ甘ニシ上下ノ
相距ル何啻霄壤ノミナランヤ政理ノ民力ニ
負ク既ニ此ニ至ラハ其善ナル者未タ以テ善
トナスニ足ラス其美ナル者未タ以テ美トス
ルニ足ラス唯其憂フヘキヲ見テ未タ其喜フ
ヘキヲ見サルナリ蓋シ物各其量アリ國各其
カアリテ政治ノ要ハ時勢ニ適スルヲ貴シト
ス故ニ政府ノ事ヲ施為スル能ク我國カヲ審
ニシ能ク我民情ヲ察セスンハアル可ラス夫
レ出ルヲ量リテ入ヲ制スルハ欧米諸國ノ政

ヲ為ス所以ニシテ今我カ國カ民情未タ此ニ
出ル能ハサル者人々ノ能ク知ル所ナレハ方
今ノ策ハ且ラク入ヲ量テ出ルヲ制スルノ曰
ヲ守リ務テ經費ヲ節減シ豫メ一歳ノ所入ヲ
概算シテ歳出ヲメ決シテ之ニ超ユルヲ得サ
ラシメ院省使察司ヨリ府縣ニ至ルマテ其施
設ノ順序ヲ考量シ之カ額ヲ確定シ分毫ヲ已
其限度ヲ出ルヲ許サス其負債紙幣、如キハ
無用ノ費ヲ減シ不急ノ祿ヲ省キテ支消兌換
漸ヲ以テスルノ法ニ供ヒ事其序ヲ逐ハサレハ

進マス法其實ヲ認メサレハ舉ケス斯民ヲシ
テ蘇息スル所アラシメ天下ヲシテ政府ノ趨
ク所大ニ昔日ニ異ナルヲ明ラカニセシメサ
ルハカラス是今日ノ時勢ニシテ我カ國カ民
情ノ適トスル所未タ此ニ愈レル者アラサル
ナリ此法苟モ一定セハ盡ク其長官ヲ會同シ
テ公布スルニ其要旨ヲ以テ互ニ相誓約シ
テ此目的ヲ失ハサルヲ務メトシ夫ノ施為ノ
緩急處置ノ先後或ハ用ヲ兵制ニ豊ニシ費ヲ
法律ニ綴ニシ或ハ額ヲ工術ニ加ヘテ費ヲ学

則ニ損シ或ハ農租ヲ遞減シテ高稅ヲ増加ス
ル等ノ如キニ至テハ衆議ヲ尽シテ其宜キヲ
斟酌シ政理民力相背カサルヲ以テ後來ノ標
準トナスヘキナリ果シテ此ノ如クナレハ斯
民モ亦其ノ向フ處ヲ知り自ラ富實ノ本ヲ勉
ムルヲ得テ政理ト共ニ開明ノ歩ヲ進ムル者
且テ企テ俟ツ可キナリ然ラズレハ内外ノ變
必ス不測ノ間ニ生シテ土崩瓦解檢束ス可ラ
サルニ至ラシ之ヲ如何リ政府ノ举措其當ヲ
得タリト謂可ケンヤ臣等無似ト雖凡亦久シ

ク乏キヲ理財ニ承タリ是ヲ以テ施為ノ務ニ
於テハ未タ大ニ其効ヲ奏スルヲ得スト雖凡
其實際ヲ親驗躬履ノ迹ニ求ムレハ未タ必シ
モ見解ナシト謂フ可ラス臣等ノ見ル所ヲ以
テ之ヲ慮ルニ今日ノ開明唯其喜フ可キ者ヲ
見サルノミナラス其大ニ憂フ可キ者將ニ彈
指フ間ニ出テサラントス是固ヨリ政府ノ措
置如何ニ在テ氣運ノ然ラシムル所ニ非ル者
昭々乎トシテ明ナリ夫知テ言ハサルハ不忠
ナリ知ラズシテ言ハ不智ナリ臣等繼ヒ不智

ノ譴ヲ受ルモ決シテ不忠ノ臣タルヲ欲セス
是ニ於テ乎其職務ニ堪ヘサルヲ以テ既ニ駭
骨ヲ乞ト雖厄區々ノ心今日ニ愀然タルニ忍
ヒス故ニ敢テ其愚衷ヲ留メテ以テ政府ノ少
シク回顧スル所アラシク望ム耳其盡言極論
嚴威ヲ冒瀆シテ顧忌スル所ナキハ固ヨリ斧
鉞ノ誅ヲ甘スルヲ以テナリ臣馨臣榮一憂懼
ノ至リニ堪ス誠恐誠惶昧死以聞

明治六年五月七日

太政大臣三條實美殿下

井上馨
榮

御附紙寫

建言ノ主意其立論適當ノ事ニ候得共事ヲ舉ケ安ヲ
指シ候所ハ現安ト相違候儀不少尤政理民力相背カ
ザルヲ以テ後來ノ標準ト為スヘキ等云々ハ適切ノ
筋ニテ既ニ今般太政官事務章程改正被仰出候御主
意ニ候得ハ右等ノ儀ニ付テハ安心可有之候然レ處
歳出入ヲ概算シ一千萬圓餘ノ不足ヲ生シ候等ノ儀
書載候得共右ハ米價一石二圓七十五錢ヲ以テ算當
候積リニテ且此内ニハ逐年繰戻シニ相成候分又ハ
發藩置縣ノ如キ非常ノ入費或ハ一時ノ費ノミニテ

年々例算スベカラザル者モ有之其上政府現今ノ負
債ヲ論シ實ニ一億四千萬圓ニ下ラスト有之是モ亦
計筭上大ニ相違ノ廉少ナカラス彼此實事ニ徴シ勘
合候得ハ必シモ毎年一千萬圓ノ不足ヲ生シ又四千
萬圓ノ巨債ヲ負ヒ候譯ニ之ナク旁右等申出ノ儀不
都合ノ次第ニ付書面其儘差戻シ候事

日新真事誌第十七号 五月廿二日

皇上其人民ニ令シテ直言ヲ免シ玉ハ、日本國
ノ幸慶ナリ而シテ人民此命令ヲ奉シテ直言
誠忠ヲ盡サハ更ニ國家ノ大幸慶ナル可シ從
來一人ノ失措ニ因テ日本國名ヲ海外ニ汚ス
者將サニ枚舉ニ暇アラサラントス而シテ將
來猶ホ此輩アラント明カニ前知ス可キナリ
茲ニ當局頃日新聞中ニ井上洪澤兩君退職ニ
際シ建白セル一書ヲ記載ス余等既ニ實際ノ
進歩ト空理ノ變革ヲ論シテ看官ニ示セシト

アリ今両君ノ建白モ亦其意此ニ出ツ且彼ノ
建白書ハ百事經驗セル人物其見識ヲ述ル者
ニテ其穿鑿スル所モ亦至リタレハ苟モ國家
ニ志アル者誰カ之ヲ考ヘサラニヤ去リナカ
ラ余カ輩別ニ注意スル兩件アリ一年中ノ入
費ヲ計テ之ヲ收納スル方策ヲ設ク可シ是レ
其一ナリ民人ニ利益スル事件ハ政府之ヲ公
告アラニシテ是其二ナリ抑人ノ一家ニ於ル家
人皆其一家ニ係ル各事ヲ知ラサル可ラス知
レハ則チ皆能クカヲ家事ニ尽クス若シ或ハ

其父其子ニ教ヘサレハ緩急ノ際何ノ互ニ相
補助スルヲ得ニヤ一國ニ於ルモ亦然リ唯大
小區異アルノミ故ニ一國ニ關係スル事務ハ
各人ノ之ヲ知ル可キ理ナリ然リト雖モ獨リ其
國民ニ各事ヲ知ラシムルヲ以テ政府ノ務ノ
足レリトセス外國人民ニモ亦要用ナル各事
ヲ知ラシム可シ此國開港以來外國諸民ハ大
ニ此事ヲ希望シタレモ終ニ未タ國事ノ真說
ヲ知ルヲ能ハス而シテ日本人民ハ常ニ外國
人ヲ欺偽シテ快ト為スモノ猶ホ多シ彼ノ井

上 廣澤兩君ノ建白ニモ此事ハ奉テ論セサレ
ハ定メテ改訂ヲ希望セサルナラン者官恐ラ
クハ知ラシ三年前日本政府英國ヨリ借用セ
シ金額四五百万兩アリ而シテ今年借用シタ
ル金額千万(ドル)ナリ龍動府ニ於テ此第二金
額ヲ集ムル時ニ當リ或人新聞誌ニ記載シテ
曰ク日本ノ貢税年ニ七千万(ポント)即チ二億
八千萬兩ニシテ費用ハ稍之ヨリ少シト是全
ク七千萬兩ト書ス可キヲ誤テ七千萬(ポント)
ト記載セシ者ナラン乎然ハ去リナカシラ歲入

ノ高實ハ四千万兩ナルニ之ヲ七千萬兩トナ
シ歲出ノ高實ハ千万兩ナルニ之ヲ歲入ヨリ
稍少シト為ス誰カ此詐言ヲ費ス疑フラクハ
英國新聞局ノ直書スルヲ憚リ一時權謀ヲ以
テ其實ヲ顯ハサハル者アラシ茲ニ彼ノ井上
君献白書及ヒ其譯文英國ヲ始トシテ其他各
國ニ達スルニ至レハ世人始テ日本國出納ノ
實事ヲ知り而テ前者英國ニ於テ出版シタル
說ハ全ク日本人ノ詐謀ニ出ル者ト為サシ且
其真偽果シテ何レニモセヨ將來英人此國ヲ

信用セサル可キナリ余等今日本政府ニ希望
スル所ハ無他其人民ヲ不知ニ保タスシテ能
ク之ヲ導キ政府ノ國民ヲ擁護スル各事ヲ知
ラシム可キノニ世人知ラスヤ英米兩國ニ於
テハ萬事公然敢テ秘密ト為スヘキナリ諸官
長其省中ノ事務ハ必ス以テ之ヲ議院ニ告ケ
其議事ハ必ラス以テ之ヲ新聞誌ニ出版シテ
全在界ニ公告スルナリ故ニ日本國其實際開
化ヲ得ント希望セハ萬事隱密ヲ旨トス可ラ
ス且詐謀ヲ行フ可ラス此旧弊ヲ洗滌シテ其

一面目ヲ改ムル時ハ始メテ真成開化ト称ス
可シ江湖ノ愚人頭髮ヲ断チ洋服ヲ着ケ只其
体裁ヲ變スルヲ以テ文明開化ト為ス者アリ
豈咄々セサラニヤ學ヲ勉メ術ヲ研クスヲ以
テ開化ノ至極ニ非ラス文明開化ノ真面目ハ
人皆誠實正直ニシテ且能ク貴優ナルヲ以テ
其基礎ト為シ其餘萬藝ニ及フ可キナリ

五月廿三日真事誌ヨリ抄ス 第二週年十六号

近頃新聞ヲ閱スルニ井上洪澤ニ氏ノ奏議アリ書中
廟堂行政ノ跡ヲ論シテ輕卒序ヲ失シ政理貌ヲ務メ
民力内ニ哀凋スルノ憂ヲ述ヘ審切懇愷至ラサル所
ナシ予以爲ラク憂國愛民斯ノ如キ者復得ヘカラス
ト而ノ今ニ氏共ニ辭職退身又余深ク惑ヘリ夫レ政
理民力相適セサル可カラサル固ニ然リニ氏之ヲ論
スル實ニ其分ナリ然レモ其文ニ曰古ハ民ヲ視ル傷
ムカ如シト今ハ帝徳カ如スル能ハサルノミナラス
却テ之ヲ法制ニ束縛シ之ヲ賦税ニ督呵スル昔日ニ

加フ編戸籍ナキヲ得ス氏社證ナキヲ得ス宅ニ地券
無ク人ニ血税ナキヲ得ス而ノ訴訟ノ費違註ノ罰有
リ物貨敗品牛馬婢僕ニ至マテ皆其律無キ有ラス一
令下ル毎トニ斯民惘然措ヲ失シ云マト夫賦税ノ則
ヲ定ムル固ニ難シ一朝ノ業ニ非ス今其變革ノ際或
ハ當否ノ差無キ能サルナリ社證戸籍地券等ニ至ツ
テハ税ヲ収ムル必然ノ理ナリ其始メテ之ヲ施ス悉
ク緩急ノ序ヲ得ル能ハサルナリ之ヲ法制ニ束縛シ
賦税ニ督呵スル昔日ニ加フト云クハ徒ニ政事ノ謗
誹ヲ聞ク亦既ニ甚シ且戸籍地券國債其佗論スル如

キハ專ラ大藏省ノ職務ニシテ突然今日出ルモノニ
非ス而ノ井上氏ノ如キハ目今大藏卿ノ代理ナレハ
宜ク黽勉擔當スヘシ然ルニ之ヲ前日ニ默シテ今日
ニ論スルハ何ソヤ予惑ヘルノ甚シキナリ抑々前日
ハ以テ之ヲ是トシテ而メ今日ハ其非ヲ悟ルカ然ル
ハ則自ラ其過ヲ舉ケテ上下ニ謝スベシ何獨政府
ヲシテ其罪ヲ受ケシム可シヤ又其文ニ曰ク何ヲ以
テ國タルヲ得ンヤ又曰内外憂不測ニ生シテ土崩瓦
解檢束スハカテサルニ至ル其佗危殆患難ノ端歷々
詳言セリ苟モ此ノ如キヲ知ラハ凡ソ國民タル者ハ

悲憂憤慨身ヲ致スベキナリ況ヤ彼ノ二氏ノ如キハ
其位甚々尊ク其職甚々重シ又其地ニ居テ其施政ノ
得失ヲ知ルヲ審且精当サニ粉骨碎身競テ而メ已ム
ハ固トニ其責任ナリ然ルヲ今回辞退身シテ之ヲ他
人ニ委セントスルハ豈大臣憂國愛民ノ情ナラシヤ
殊ニ立論適實ニ似タルアリト虫モ事ヲ挙ケ実ヲ指
ス所ノモノ性々適切ナラサルアルヲ覺フ是余ノ疑
惑喋々已マザル所以ナリ因テ論辨スルヲ此ノ如シ
モシ明解アラハ乞フ一筆ヲ惜マサレ斯ク云フ者ハ
東京第五大臣小ニ臣ニ寄宿セル入間縣下獨立自主

ノ農民某ナリ

五月廿四日横濱新聞ヨリ抄ス 七百四十一号

官途久歎誤居諸 解印今朝意轉舒

突我婆心猶未脱 献芹尚奏萬言書

此詩ハ大藏省三等出仕ノ殿様ノ御作ナリト私ニ見
セシ人カ御座リマシタカラ能ク拜見致シマスルニ
詩ノ巧拙ハ私共ノ存シマス事デハ御座リマセンカ
轉結ノ二句甚タ朝廷ニ對シテ不濟事ト存シマスナセト
ナレハ婆心トスイラヌ事ト申意味テ御座リマシテ乍
悉御國ハ 皇統連綿既ニ二千五百三十三年ノ久シ
キモ不被為愛誠ニ難ナク 天子様ヲ君ト戴キマシテ

御授ケ成サレマシタハ何カ深キ思召テモアリマシ
タ事カ右ノ詩突我婆心ノ氣ニ喰ハヌヨリトシタ長
嘶シナレト先日ノ奏議ヲ見ラメテマクテヤニ感服
ナドスルニ一應御嘶シ申度且奏議ハ虚妄ノミナラ
ス外國ノ交リニ付テハ國ノ大害ナル事共存シマス
カラ私夙情ニテモ黙止カダキ事テ御座リマスカラ
貴社ニ御頼ミ申世間ノ感服スル人ノ目ヲ覺サント
スル者ハ東京本郷弓町ノ住人真田則武也

日新真事誌 五月廿四日

頃日井上馨洪澤榮一兩君退職ノ際建言スル
所ノ奏議アリ之ヲ各新聞紙ニ記載セシヨリ
横濱ニアル各國新聞誌ニ記載シ外國人モ皆
之ヲ看讀スル事ヲ得タリ論スル所ノ旨意大
藏省ノ事務當否ヲ辨解シ即今政府ノ政理上
ニ噪馳スルノ弊ト民力上ノ實際ニ當ラサル
所ノ理ヲ説明ス外國人之ヲ評シテ時勢的當
ノ確論ナリトス而シテ兩氏ハ願ノ通り免職
退身ス議スル者直言逆耳ノ說アリ余等退テ

之ヲ考フルニ政府賢ヲ求ムル恰モ大早ノ雲
睨ヲ望ムカ如シ豈敢テ忠言ヲ忌憚スルノ理
アラシ恐ラクハ云フ可ラサルノ情理アリテ
其人ヲ用ヒサルニ至ラシ亞細亞東方ニ一種
ノ弊習アリ身責任ニアツテ已レヲ責メスシ
テ他ヲ責ム若シ意ノ如クナラサレハ辭職退
身シテ一此ヲ保全スルヲ賢トス之レ歐洲ト
大ニ異ナリ歐洲人ノ尚フ所ノモノハ任スル
所ノ職務ヲ擔當勉勵シ孜々トシテ已ヲ責メ
心カヲ尽シテ毫モ一身ノ安危ヲ顧ニス國家

ト共ニ浮沈ヲ同フスルヲ賢トス豈ニ氏ノ如
ク國家危難ヲ傍觀シテ身ヲ退キ已ヲ全フス
ルノ理アラシ之レ余輩ノ外人ト異見アル所
ナリ然リト雖也二氏ノ奏議ヲ以テ論スル片
ハ斯ク愛國愛民ニ心思ヲ注クモノヲ採ラサ
ルハ政府ノ名望ニ関スルハ其事故ヲ明白ニ
諸人ニ知ラスルヲ要トス吾カ英國ノ如キハ
高貴ノ官人期年ニ至ラス其官職ヲ解止スル
片ハ其次第ヲ新聞紙ニ記載シ普ク人民ニ公
告スルナリ冀クハ政官コ、ニ注意シテ喋々

ノ疑團ヲ氷解セラレニ事ヲ

五月廿六日横濱毎日新聞ヨリ抄ス 七百四十二号

或大家ノ支配人三番伴頭ト俱ニ其主人ノ家事會計
ヲ賄ヒ表向キ勉強忠勤ヲ盡クセシ如クニ見ヘシカ
ト各高給ヲ取り自分権利ニ過ラ手代小者ノ下輩ニ
迄心届クサルヨリ漸々別家通ヒ伴頭達ノ気合ヲ損
シ其帳尻ヲ洗ハレ落度ヲ咎メラレナトシケル故兩
人モ氣持アシク所詮主家ヨリ暇ノ出ヌウテ此方カ
ラ辞スハシト相談シ暇願ヒヲ出シケル其序デナガ
ラ主家ノ不經濟ナル事又一門別家宅持伴頭等一時
ニ主家ヲ富豪ニナサントスルヨリ數年来家蔵ノ道

具ヲ其儘差置キ新ニ他國遠方ナトヨリ奇品珍物ヲ
直段ニ構ハス買取りテ見カケヲ立派ニ繕口ヒ飾リ
商法モ大業ニスレ氏仕入澤山ニテ元價高直ユヘ一
寸ニハ利ヲ見ル事ナラス勘定合テ錢足ラス出入帳
ノ括リカ合ハヌトノ明細書ヲ一番伴頭ハ書遣シテ
永ノ暇ヲ貰ヒタリ此書附ノ文面ニ就キ一家親類ノ
者或ハ道理ナリト感シ或ハ非理ナリト誇リ果テハ
出入ノ者近邊ノ湯屋髪結床マテノ風聞トナルヨリ
竟ニ此事遠國取引ノ店々迄ニ知レ大評判トソナリ
ニケル

一人評シテ曰彼ノ兩伴頭是マテ主家ノ事ニ就キ種
々心配ヲサレタナレト都テ家事ヲ賄フ所ヨリ金銀
出入モ自由ニ扱フユヘ傍輩カ見テハウマイノヤ
来ル者ト常ニ羨ヤマ舗心アルヨリ各疑念ヲ生スレ
トモ賄フ身分ニ為ルト傍テ見ル様ニパツパトヤラ
カシテハ勘定カ合ハス帳尻ノルノハ賄ノ落度ナ
レハ自然ニクラシ方ヲ詰テ家内一門マテ贅テ事ハ
省カセ改革スルヲ傍輩ニハ氣ニ入ラス自分ハカリ
奢リテ佗ヲ詰ルトノミ疑ヒ妬ミノ心弥々増シテ竟
ニ大番頭ニ告ケロシ陰ニマワリテ散々忌シク云故

追々ト一家ノ氣受モ惡シクナリ斯ル仕義ニ及
タルハ實ニ氣ノ毒千萬ナリ彼ノ兩人ノ書置シ文面
一々尤モ至極セリト之ヲ聞テ又一人頭ヲ振テ曰
ク否々

夫ハヲマヘノ鼻負目ナリ私シカ論ハ大キナ相違彼
ノ兩件頭夫レ程ニ主家ノ為ヲ思ヒ暇ヲ貰フ後マテ
モ跡ノ心得ヲ書ニ殘シテ置程ナ忠義ノ心カアラハ
勤ラ居ル内カラ不經濟ハ知レテアラフニナセ前以
テ言ハヌテアラフ賄ヒ中ノ不足ハ賄人ノ落度故總
勘定カ合ヌト見タラ相成丈儉約シテ傍ヲ何ト云フ

共是ハ斯ラスルト爰ヘ宍カアテ故夫テハ私ノ落度
トナルカラ爰ヲ斯ウ切り詰ルノシヤト何憚カラス
議論シテ會計ヲ立ルカ宜シイト思ハレマス若夫テ
モ傍輩カ何ノ彼ノト言フナラ其時立込ニ暇ヲ貰ツ
テ餘処ナカラ主家ヲ守ルノガ白嵐ノ伴頭彼歌舞妓
芝居ヲ見テモ知レテアル然ルニ弥々勘定カ合ヌト
見切テ此方カラ主人ニ暇ヲ出ス同様ナ仕方一圓合
點カ忝ラヌ夫耳ナラス主家ノ不會計ヲ一々並ヘ立
テ書殘サレタハ後ノ為トハ申ナカラ昔ニト違ツテ
当節ハ一時ノ車ニ七里ヲ行キ一響キノ針カ子テ敷

百里へ通スル世の中又千里眼順風耳ノ新聞紙流行
ユハ直ニ遠國他國ノ店々ハ知レ自然ト取引モ不融
通ニナル理ヲハ御座ラヌカ左スレハ主家ノ損失ヲ
挙ラ自身ノ名聞ヲ引札ニシテ様ナ者ヲ私共ハ少シ
モ感心致シマセヌト息キセキ張ラソ論シケル此兩
人ノ論説是非如何總テ世上ノ伴頭ニ問フ

日新真事誌第廿一号 五月廿七日

余貴社所載井上馨公澤栄一ノ建言ヲ閱スル
ニ文章ノ妙固ヨリ稱賛ヲ待タス然ルニ一二
ノ解セサルアリ曰ク政府民ヲ視ル傷力如キ
能ハサルノミナラス法制ニ束縛シ租税ニ督
呵ス昔日ニ加ルアリト夫レ旧幕府ノ時ニ方
テ國其政ヲ異ニシ家其法ヲ同フセス正租雜
租ノ外宮室衣服ノ費ヨリ僕妾ノ糜ニ至ルマ
テ尽ク之ヲ民ニ課ス人々因習ノ久キニ安シ
恬トシテ怪マズ且ツ其各藩人民固有ノ権理

ヲ剥褫シ生殺與奪ヲ專シ同一ノ罪ヲ犯シテ
各其罰ヲ異ニセリ今ヤ租稅寮アリテ租稅ノ
原ヲ審ニシ收除當ヲ得偏重偏輕ノ弊ナキニ
歸シ司法省アリテ宇内ノ法ヲ斟酌シ民權ヲ
復シ匹夫匹婦モ其所ヲ得其有ヲ全セシメン
トス抑一令アル毎ニ廣ク諸省ニ下シ各意見
ヲ吐露セシメ而テ後施行セリ馨等ノ職ニ在
ル編戸ノ籍民社ノ證徴兵ノ令物貨販買牛馬
僕婢ノ稅等ニ至テ皆ナ其上請スル所ナラス
ヤ然ルヲ馨等悉ク政府ノ苛刻ニ出カ如シト

謂フニ似タリ蓋シ天下ノ愚夫愚婦ヲ欺キ已
レ其辭職ノ跡ヲ飾リ政府ヲミテ怨府ヲラシ
メントス吁是レ何心ソヤ古人諫草ヲ焚キ曰
ク君ノ惡ヲアラハサスト君ノ非アルヤ尚且
ツ之ヲ掩ヒ自カラ美名ヲ避ケテ居ラス況ヤ
方今政府至正至公収サル可ラサルノ稅ヲ収
メ建テサルヘカラサルノ法制ヲ建ツ而シテ
馨等ノ失言此ニ至ル吁而甚シ余上ハ政府ノ
為ニ憂ヘ下ハ滿天下ノ此ノ建言ニ惑シ丁ヲ
懼ル依テ之ヲ駁スルモノハ第六大區五ノ小

區寄留永田某ナリ

横濱毎日新聞第七百五十二号

六月廿日

我近頃ノ新聞紙ヲ閱スルニ書中井上澁澤ノ両氏ヲ大ニ誹謗シタル投書アリ已ニ二十六日ノ新聞ニハ之ヲ或家ノ番頭ニ比シ種々誹説ヲ掲載シ剩サヘ二氏已レカ芳名ヲ四方ヘ輝サン爲メ心ニモナキ利害得失ノ理論ヲ忠義ヲシク政府ニ向テ述タナソト云々又其他ノ新聞ニハ澁澤氏ノ生質ヲ陳テ曰ク彼ハ素ヨリ政府ノ爲ニハ一身ヲモ輕ンシ人民ノ爲ニハ我身ヲ忘ル、人物ニハ非ス世ノ勢ニ因リテ心ヲ變シ

唯世ヲ幸福ニ送り衣食住ニ不自由ナケレハ足
レリトシテ奉職中モサノニ國事ニ勉勵セサル
様ニ嘲リテ投書人至極得意ノ色ヲ為シタリ
我ハ素ヨリ官途ニ暗キ故ニ氏奉職中其處置
舉動ノ正非ヲハ勿論評シ得ス因テ今投書人ノ
意ヲ察シテ數行ヲ述ヘシ夫レ投書人右等ノ誹
論ヲ舉テ公見ニ供シタル主意ハ天下一般ノ利益
ヲ圖リ忠節一途ノ心ヨリナル乎思フ恐ラクハ
然ラス唯徒ラニ私意ヲ以テ之ヲ譏リ獨リ已
レカ面目ヲ求メントスルノ欲心ナランカ如何ナ

レハ二氏職ニ在リテ事ヲ活發ニ斷裁セシ中
ハ默然トシテ唯一語ヲ以テ其美惡ヲ評セス
而シテ今ニ到リ種々誹論ヲ舉テ世間ノ聞見
ニ供スルトハ豈卑怯ナル心ナラント云タラハ平民
官吏ヲソシルハ天下ノ禁法ト答ン然レトモ事實
官吏罪過アレハ政府ニ向テ其過失ヲ闡論シ新
聞ニ載セテ之ヲ公ニスルトモ豈恐ルニ足ランヤ
政府若シ 鈍ニシテ其正論ヲ採用セサレハ已レ
カ身命ヲ擲テ其事ニ勉勵周旋スルコソ真ノ報
國盡忠ノ人ト云ツヘシ今井上澁澤兩氏ノ止邪

ヲ論シテ新聞紙ニ掲載スル程世間ノ利ヲ謀ル
輩ナラ今日迄因循セスト何故一身ヲ輕ンシ一
國ヲ重ンシ彼等奉職中ニ断然其非ヲ政府ニ
對シテ闢論シ新聞紙ニ舉テ四方君子ノ明論
ヲ待サリシヤ今日世間ノ有様ニ因リ又其人ノ勢
ヲ見其正非ヲ闢論スレハ卑怯ノ人物ト他人ノ
嘲リヲ逃ル可ラス故ニ恐ラク此誹論ハ私怨ヨ
リ出タル事ナラン若シ私怨ニ出ストモ斯ル腐
輩ノ論ナラハサノミ貴ムヘキモノニアラス已ニ過
日ノ新聞ニハ澁澤氏ハ世ノ勢ニ乘シテ事ヲ處

シ人ノ勢ニ依リテ志ヲ挫シク人物ナント誹レ
トモ其誹謗人モ同シク世ノ勢ヲ見テ人ノ正邪
ヲ論スレハ是又卑怯ノ罪ヲ免ルヲ得スサレハ今
其人カ他人ヲ卑怯タノト譏ルハ自分カ自分ヲ
譏リ自カラ鄙陋ノ心ヲ世ニ晒ラスト寸毫モ異
ナラスト拙辯ヲ以述フルハ當地寄留ノ一書生
ナリ故ニ四方ノ博士拙文ヲ笑ハス宜シク我素
意ヲ察シ賜フヘシ

東京日々新聞第三百九十一号

六月七日

余ハ江湖人ナリ嚮ニ井上澂澤両氏ノ建言ヲ
看ルニ已ニ四千万圓ノ債ヲ負ヒ又毎年一千
万圓ノ不足ヲ生スト夫國家撥亂反正ノ際廢
藩置縣ノ如キ非常ノ入費アルハ固ヨリ宜ナ
リ其之ヲ支給スル方法ハ意フニ將ニ建設ス
ル所アラント而シテ両氏ノ所論ニハ不足ヲ
生スル云々因テ之カ為ニ嘆息日ヲ竟フ既ニ
シテ恭シク政府ノ批文ヲ捧讀スルニ歳出入
ヲ概算シ云々右米價一石二圓七十五錢

當候積リ且ツ此内ニハ逐年繰戻ニ相成
又ハ非常ノ入費或ハ一時ノ費ノミニ年々
例算スヘカラサル者モ之アリ其上現今ノ負
債ヲ論シ是亦計算上大ニ相違ノ慮不少云々
是ニ於テカ梓讀數回欣躍止ム能ハス曰ク是
アルカナ政府果シテ財政有法ナリ退テ又熟
考スルニ疑團ノ未夕解セサルアリ蓋シ西氏
ハ大藏卿ノ代理ヲ辱シ職ニ居ル久シカラス
トセス權ヲ握ル專ラナラストセス而シテ建
白云々西氏英敏ノ資ト雖モ居常瑣細ノ件ノ

如キハ違算或ハ註誤ノ必無ヲ保タヌ其決然
退職ノ際ニ當リ畢生ノ精力ヲ極メ抵死抗言
シ政府ノ回顧アラントヲ希望シ之ヲ各種ノ
新聞紙ニ記載シ人民ニ衒示スレハ必スヤ論
スル所精確ナルハシ然ルニ批文ハ如此抑政
府ハ人民ノ信仰愛載スル所西氏モ亦人民ノ
具瞻ニ居ル人民疑惑孰シカ適從スルヲ知ラ
ス且ツ方今外交ノ熾ナル朝庭ノ一举措瞬時
宇内ニ傳播ス乃チ政府ノ批文西氏ノ建言業
已ニ欧米各國ニ流布シ外國人民モ亦將

惑スル所アラントス伏テ願ハ政府速ニ之ヲ
正シ之ヲ詳ニシ更ニ内外ニ公告シ人民ヲ明
諭シ玉ハンコヲ第四大区五小区寄留生橋村
忠勝再拝

二月九日

内史本課

別紙翻譯局差出修書供
高覽也

大文

番外六

井上汎入西氏ノ建白

井上汎入西氏ノ建白ノ事情ヲ探索スルニ愈之
 ヲ探レハ愈曖昧ナリ僅カニ一年以前政府金ヲ
 借ラント欲シテ二名ノ使節ヲ亞米利加ニ派出
 セルヲ下リ其一人ハ亞人ニ各國會計ノ体裁
 ヲモ知ラス自國ニ於テ之ヲ募ラハ他國ニ於テ
 スルヨリモ廻カニ利ナラントテ漫然其役ニ任
 セシホドノ愚人ナリ今一人ハ日本人ニ右ノ
 如キ淺愚ノ見ヲ立タルモ識ルニ足ラス是ノ如
 ク盲人ノ盲人ノ手ヲ引テ事ヲ行ハハ其末挫敗

龍澤司

財と身とを
 我輩の
 おも
 所ハ
 只
 此
 國
 の
 族
 也

至ラン一ハ夜ノ日ニ迷クヨリモ尚明ラカニ
此使節僅カニ其色名ヲ汚シ僅カニ囊中ノ金ヲ
費セルノミニテ他ノ窘厄ニ陥ラサリシハ此輩
ノ幸ト習フヘシ然レモ財主ハ文章ノ鼓舞ニ惑
ハサレテ深クモ之ヲ疑ハス殆ント千万金ノ貸
借ヲ領若セリ其後久シカラスメエコロミス
中書中貧富モ定カナラナル國ヲ輕信シテ大金ヲ
借典スルノ危ウキヲ云ヒ其中金ヲ借ルノ目的
甚タ分明ナラス且其政体形勢等モ未タ全ク宇
野ニ知ラザル國ナレハ其財主ナル者ハ極メ

ヲ謀慮周密ナルヘキヲ論シテ世人ヲ諒メシカ
遂ニ其總額ヲ分賦シ競フテ之ヲ貸シタリ又古
ニ記セルト甚々相類似セル一書其後世ニ出シ
カ其詳細ニ至テハ小異ナキニ非スト虽モ其出
細ノ大計ニ至テハ共ニ會計ノ富饒ナル状ヲ説
ケリ此二書ハ並ニ官ヨリ出ル者ニテ官トハ大
藏省ヲ斥スルト恐ラクハ疑ヲ容レス然レハ井
上氏縱令募金ノ首謀ナラスモ二使ノ奉スル所
ハ同氏ノ命ナルヘシニ使ノ亞國ニ行ケルハ同
氏ノ許ヲ得テナルヘシ而シテ二使ノ聞知セル會

財し事... 叙紫の... 所ハ... 只お國の旅

計内部ノ体裁ハ之ヲ同氏ヨリ聞ケルヲ亦恐ラ
クハ疑フ容レス

然ルニ此書出テ未タ十月ナラサルニ同氏建白
シテ辞職ヲ請ヒ恰モ一大地雷ヲ放テ全政府ヲ
震裂セリ其書中巨大ノ負債アルヲ載スルハ決
シテ前書ノ言サル所ニ其列相ノ政令実
着ナラサルニ依テ毎歳二百万ポンドノ不足ア
ルヲ云フ嗚呼此ニ説ノ齟齬ハ果シ何ニ由レル
ヤ實ニ此ニ至リ余ヲノ范然自失セシム

ハニ政府ノ更置ヲ論セニ政府刺シノ怒テ此ニ

書ヲ黜ケタリ然レ其不忠ニ当スルヲ責ルニ
非ス又政府ヲ譏毀セル言ノ浮乏ナルヲ責ルニ
非ス唯其論ノ實ニ違フヲ以テ納受ス可ラサル
ヲ云ヘリ政府才一ニ云フ米價ノ四口ニ莫ヒス
ノ二圓七十五錢ニ算セルハ低キニ過キタリト
才ニニ云フ廢藩置縣ノ費用ハ一時ノ費ニノ例
算ス可ラスト才三ニ云一億四千万三千万ポ
ンドノ國債アリト云フハ多キニ過クト案スルニ
最モ國債ノ數ヲ増息スル者ハ工部ノ費用ナリ
然レ其諸興利ニ用フル金ハ又大ニ債ヲ所アリ

財と身とを
我輩の
所ハ只お國の
核心

飛躍

審言

大正

然ルヲ建言中一概ニ之ヲ負債ト算スルヲ以テ
 計算合セス政府國債ノ一事ヲ排撃セルハ蓋シ
 此ニ原ツクナラン
 次ニ建言中論スル所ノ得失ヲ論セシ其建言ノ
 奉リタル主意モ固ヨリ忽ニス可ラサル所ナレ
 氏今其主意ハ姑ラク措キ其議論ノ的切ニ政
 府ノ最モ意ヲ留ムヘキ所ナルハ掩フ可ラス其
 才一ニ云フ或ハ旧功ヲ録スヘキニヨリ或ハ傑
 概ヲ馴服スヘキニヨリテ冗官遊吏ノ為ニ國財
 費ナルト極メテ多シト令假リニ此説ヲ信

スヘキ者トシ且政府人望ヲ維持スル為ニ己ヲ
 得スノ此害ニ陷リタリトセハ何ノ策ヲ以テ之
 ヲ救フヘキヤ余ヲ以テ視レハ断然貿易ノ桔槔
 ノ放テ其勢ノ赴ク所ニ任セ貿易ヲ業トスル者
 ノ為ニ其交接及金貨ノ制禁ヲ解キ殊ニ在上ノ
 人ノ商法ニ典カルヲ禁スルヨリ他ナシ先ツ諸
 省ニ於テ貿易ノ事ヲ掣肘スルノ弊ヲ除カサル
 可ラサル
 方今在職ノ人ハ其勤勞ノ報ヲ國ノ昌栄ニ求メ
 官爵ヲ以テ私ヲ營ムノ益ト為ス可ラス官ノ俸

財と事とを
 我輩の
 所
 只
 國の
 旅

給ハ僅カニ其官職ヲ保ツニ過キサルニ人皆官
 ニ就ク寸ハ貧ニノ官ヲ去ル寸ハ富ノリトテ道
 路密カニ之ヲ議スルニ非スヤ官吏金貨ノ權ヲ
 握ル間ハ貿易如何ソ隆起スルヲ得ニヤ執政民
 ノ利益ヲ忘レテ政府ノ大柄ヲ其私利ニ轉用セ
 ハ貿易ノ自由ハ果ノ何ノ処ニアリヤ願クハ此
 輩ヲノ少シク外國ノ例ヲ視セシメ政權ヲ以テ
 商法ヲ為シ官爵ヲ以テ自肥ノ具ト為ス者國ニ
 當ル寸ハ其害果ノ如何ヲ知ラシメニトテ日本
 古來義氣ニ富タレ國ニ忠憤節義ノ例數ナ

カラス当路ノ人ハ少シク此等ノ人ヲ学フベシ
 建白中又云下民大半ハ文化ノ進歩ヲ知ラサレ
 ハ或ハ他人ニ仰係シテ得ルヲ萬一ニ徼律シ
 或ハ壟斷ヲ私シテ私ヲ網スルヨリ他ニ出ル
 能ハスト然レニ貿易ノ途ニ於テ歩々制禁障
 ニ逢フ間ハ此ニ出スノ何ヲカ為サニヤ且言フ
 放テ是等ノ害ヲ幾ルモ其禍ヲ救フノ術ヲ設ケ
 ナレハ空論果ノ何ノ用ヲ為スヤ昔セ子カ自ラ
 三百万金ノ富饒ニ居列書ヲ著シテ富ノ賤ムヘ
 キヲ説シテアリ然レニ其説高尚ナリト云レ世

財し事すは 叙此のあり所ハ只外國の核

人決シテ其益ヲ蒙ラス
 次ニ官吏各事ヲ奉ケ功ヲ建ント謀リテ營々ト
 ノ競奔スル状ヲ縷説ス思フニ其害タル實ニ大
 ナルヘシ然レモ何ヲ以テ此害ヲ救ハント欲ム
 ルヤ学業未タ成ラズ海外ノ奇異ヲ洞觀スルニ
 足サル少年ヲ安リニ外國ニ遊学セシムルノ失
 計ナルハ余ノ曾テ屢言ヲ所ナリ此輩英國仏蘭
 西米利幹等ニ至リテ唯其外形ニ驚サレ帰テ之
 ノ事ニ施サハ半歳ヲ出スノ國ヲ誤ラント必セ
 卓見アリ人ノ外國教師ヲ斥ノ告忠ヲ忍セニシ

全フ亞米利カニ慕リ貨幣ヲ改造スルカ如キ拙
 策其他識見ノ雜取猥弱ニモ一定セサルハ皆此
 ニ原ケリ但此遊学ノ一益ハ人々久シク固ヲ鎖
 セル誤ヲ知り少シク慢心ヲ挫テ自ラ足レリト
 スルノ陋ヲ去ラント欲スル心生スヘシ然レモ
 日本ノ為ニ謀レハ其國ノ民情ヲ酌シ其古史ヲ
 鑑ミテ法律ヲ制シ人目ニ慣レサルコトナホ
 レオナラ以テスルヲ勿ルヘシ外國ノ民ヲ其
 政權ニ屈セシメント欲スル心ヲ棄ツヘシ愛國
 ノ情ヲ薄シ義氣ヲ損スルヤウノ事ヲ避クヘシ

財と身とを
 我輩のちよ所ハ只外國の権心

外國今日ノ開化ハ數百年來思フ盡シ難キヲ忍
ミ良法ヲ設ケテ嚴密ニ之ヲ遵奉シ真理ヲ極メ
テ確着ニ之ヲ施行セルニ依テ成レル者ナルヲ
知ルヘシ

右ニ記スル所ハ唯建言ヲ略論スルノミ然レモ
政府ニ於テモ外國人ニ於テモ之ヲ熟読セハ必
ス益ヲ得ルヲアルヘシ

余ハ艱難ニ當テ辭職スル者ヲ好マス危害ニ臨
テ首竄スル者ヲ好マス其辭職ト辭職ノ法ト共
不可ナク戰場ニ立テ一歩ヲ退カス戰ノ終ル

ヲ視ルコゾ忠勇ノ士ト習フヘケレ余ハ必ラス
此辭職ニ興セヌ

財し事ヲ自 叙業のちる所ハ只外國の族

飛躍

財し身と自 叙紫のち所は只公國の核心

を	資	不	臣	敢	一	語	此	如	前
命	用	り	の	く	事	此	何	何	の
七	將	惟	法	許	此	ぶ	あ	あ	大
ち	年	ふ	子	さ	よ	し	ふ	ふ	藏
ろ	給	ふ	て	、	り	し	へ	へ	大
へ	七	一	之	所	起	の	き	き	輔
き	さ	人	を	に	ま	古	み	み	等
も	ら	の	評	し	り	の	て	て	上
敢	人	宰	者	て	蓋	如	も	書	を
く	と	臣	者	政	一	く	悪	世	世
恐	る	國	皆	羅	事	天	事	公	公
也	不	任	異	巴	々	下	轉	告	告
ん	至	を	論	の	ハ	の	て	し	し
若	る	者	未	法	國	為	善	多	了
し	を	何	き	み	人	且	根	了	簡
其	察	り	所	て	の	喜	と	了	簡
身	し	其	の	七	聞	ふ	あ	了	簡
を	自	國	者	亞	く	へ	ふ	了	簡
殺	盡	の		細		き	ふ	了	簡

龍畢

審言

大正

其	と	數	あ	國	因	金	祿	自	し
遺	を	の	り	の	於	錢	を	畫	て
算	さ	偽	其	為	於	工	一	の	切
の	し	詐	幽	不	死	関	方	命	迫
為	ハ	亦	魂	死	を	係	今	も	を
不	難	き	を	も	慰	し	茅	受	ふ
死	し	不	を	と	を	て	一	け	困
し	る	善	を	云	忠	會	櫃	ん	難
る	者	算	を	ふ	死	計	要	と	を
き	ハ	者	所	ハ	の	簿	と	を	除
忘	固	ハ	ハ	嘉	譽	帳	あ	を	く
其	よ	固	之	を	稍	の	る	此	き
碑	り	よ	ハ	へ	損	管	所	の	得
面	其	善	為	く	去	理	の	如	へ
不	謂	算	不	受	一	し	事	人	き
敢	あ	者	歳	を	刻	難	ハ	必	あ
く	し	を	入	へ	と	き	多	に	ら
後	後	尊	歳	き	雖	そ	く	其	喜
世	世	て	出	事	ト	が	ハ	義	ぶ
		神	の		原			心	
								を	
								賛	

審計局

其	前	也	藏	慶	其	前	味	を	は	其
前	の	也	長	し	前	の	多	出	必	其
績	大	也	官	其	の	大	る	を	心	事
の	藏	也	の	一	大	藏	善	至	一	官
如	大	也	為	事	藏	大	事	を	宵	の
何	藏	也	不	不	大	大	ハ	其	人	政
日	大	也	忠	忠	大	大	給	見	の	府
論	大	也	々	々	大	大	官	積	政	を
ふ	大	也	一	一	大	大	の	書	府	輔
く	大	也	て	て	大	大	許	の	を	護
最	大	也	且	且	大	大	し	精	難	を
後	大	也	つ	つ	大	大	五	不	固	難
の	大	也	無	無	大	大	不	精	よ	固
一	大	也	算	算	大	大	易	ハ	り	よ
事	大	也	の	の	大	大	の	暫	あ	り
ル	大	也	臭	臭	大	大	者	く	あ	り
乙	大	也	氣	氣	大	大	と	論	あ	り
全	大	也	何	何	大	大	と	せ	あ	り
切	大	也	る	る	大	大	と		あ	り
破	大	也	大	大	大	大	と		あ	り

飛騨局

財と事とを我輩のあつ所ハ只外國の核

財と事とを
 我々の
 所
 只
 外國の
 後

備 外 備 必 須 得 難 き 朝 の 報 の 端 緒 あり	第一 田 租 ハ 四 〇、 二 六 三、 五 八 八 圓 と 積 り 其 據 り	所 米 或 ハ 都 會 及 甚 遠 ゝ る 地 及 テ ハ 全 一	所 納 る 年 貢 米 及 保 山 林 園 圃 其 他 私 有 地 及 テ	所謂 王 家 の 地 及 納 る 税 其 中 一 ゝ 納 り テ 屋 多	あり 余 思 上 下 政 府 及 納 る 米 の 石 數 ハ 全 數 を	擧 げ て 千 才 石 と 常 及 稀 を 見 ても 真 の 高 上 り 遙	少し 其 價 大 一 定 之 難 則 按 上 遠 々 ち に して 諸
--	--	---	---	---	---	--	---

飛
 騾
 局

其記述する所著し十知ありさりとありハ一身
 の評判あり関係
 前大花大捕の言ふ所見正しく且つ備ハる
 とおそ谷の何しへき
彼上書人の積り所ハ現在
 一ノハ歳入の前より知
 又一ノハ負債を
 大々言過き或る所
何れは是を以て大花有の簿帳
 正しく積過りたり
其以上書を本人等へ戻さ
 其の昔を記せり此書ハ體裁未
 十々ありさき
 且つ外國人及
 至重至貴の者
 及
 一ノハ畢竟政府
 計書あり且つ其書
 の

財し事と自 我業のちる所、只ふ國の核心

以	去	去	の	用	る	信	を	條
北	了	り	収	を	二	ハ	と	を
海	去	蓋	納	あ	ハ	年	見	換
道	ち	し	と	さ	非	々	お	除
の	り	其	算	ハ	以	二	き	き
所	人	切	を	必	蓋	〇	海	海
納	が	手	算	に	し	〇	関	税
ハ	局	を	を	大	初	〇	と	至
魚	の	賣	全	増	活	〇	て	ハ
海	大	り	を	加	板	〇	八	前
草	費	納	以	ハ	の	圓	年	の
等	出	ま	て	し	誤	納	所	納
の	の	る	之	郵	を	ま	納	基
税	部	所	之	便	少	る	し	き
の	と	此	之	亦	一	と	ハ	算
一	載	數	之	同	く	〇	鉄	電
と	見	を	之	教	過	〇	道	
多	え	と	之	と	多	〇	電	

飛驒局

如	等	ド	田	せ	少	十	子	紅	貢
々	ハ	の	租	其	高	五	從	路	税
以	彼	新	を	中	二	銭	て	の	皆
論	四	開	五	を	過	五	異	陰	金
年	〇	紙	九	得	き	〇	さ	大	納
を	二	二	三	二	二	四	上	街	と
追	六	八	六	四	四	圓	書	道	あ
と	三	六	三	七	〇	と	人	河	る
漸	〇	〇	六	十	五	を	の	筋	へ
く	〇	〇	二	五	銭	る	積	海	し
増	と	〇	五	圓	ハ	と	り	港	係
加	積	〇	〇	と	低	常	多	或	し
ハ	る	〇	〇	し	く	同	る	ハ	未
ま	の	と	を	維	恐	通	ハ	都	價
へ	正	を	ま	也	く	例	會	會	ハ
し	中	と	と	納	ハ	有	へ	の	庫
次	あ	も	も	發	二	る	の	遠	其
の	る	も	も	兌	圓	か	近	地	地
數	も	此	一	の	七	是	異	異	異

大正

財し身とす我輩のあそ所、只お國の核

九	次	得	と	そ	華	を	々	り	年
〇	の	て	安	ハ	族	借	減	政	一
〇	數	益	利	政	族	・	を	府	新
〇	條	を	の	府	の	事	へ	の	の
〇	別	取	金	ハ	事	の	き	此	測
〇	ノ	る	を	地	の	主	ね	等	大
〇	説	者	以	を	意	を	固	へ	名
〇	く	さ	て	剥	を	考	り	配	士
〇	へ	す	一	き	考	合	を	分	卒
〇	き	す	時	大	大	を	へ	を	の
〇	事	く	限	減	減	其	き	者	土
〇	工	工	不	を	を	金	者	未	地
〇	部	部	渡	へ	ハ	は	り	係	を
〇	省	省	財	き	其	其	し	其	剥
〇	の	の	食	さ	金	金	其	數	き
〇	費	費	の	り	は	と	年	年	ま
〇	二	二	問	左	と	年	々	々	さ
〇	圓	圓	の	左	年	々	々	々	さ
〇	一	一	差	左	々	々	々	々	さ
〇	七	七	の	左	々	々	々	々	さ
〇	七	七	を	左	々	々	々	々	さ
〇	三	三	を	左	々	々	々	々	さ
〇	一	一	を	左	々	々	々	々	さ
〇	二	二	を	左	々	々	々	々	さ
〇	圓	圓	を	左	々	々	々	々	さ

次	消	扱	故	別	く	臨	通	略	
ノ	還	又	其	其	ハ	時	常	計	
華	を	歳	其	其	箱	歳	歳	入	
士	へ	出	總	説	館	入	入	入	
族	き	を	教	と	又	入	入	入	
の	の	見	を	あ	納	入	入	入	
福	高	了	奉	ま	込	入	入	入	
一	二	了	く	を	込	入	入	入	
六	六	了	を	要	込	入	入	入	
六	七	了	せ	せ	込	入	入	入	
一	九	了	さ	さ	込	入	入	入	
三	一	了	る	る	込	入	入	入	
八	〇	了	者	者	込	入	入	入	
一	〇	了	の	の	込	入	入	入	
六	圓	了	と	と	込	入	入	入	
圓	何	了			込	入	入	入	
何	り	了			込	入	入	入	
り	り	了			込	入	入	入	
是		了			込	入	入	入	
前		了			込	入	入	入	

大正官

審計局

財し身し台 叙業のあは所ハ只外國の族心

Table with columns for financial details such as '歳出', '歳入', '圓', and '差引'. Includes handwritten annotations like '高計' and '當年'.

飛躍

Table with columns for financial details such as '巡訪', '公使', '費用', and '歳入'. Includes handwritten annotations like '諸國' and '政使'.

番言

内	外	國	債	の	事	は	就	き	更	正	辨	を	る	所	何	と	末	文
是	預	算	先	を	る	所	正	し	と	少	々	の	出	入	ハ	何	と	ハ
々	と	七	井	上	馨	の	算	を	る	如	く	一	四	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	の	不	足	を	生	ま	る	と	決	し	て	出	を	あ	し	と	云
り	以	上																ハ
咄	の	問	何	り	此	歳	出	入	書	を	見	く	世	人	何	と	思	
ふ	也	之	を	信	を	る	と	果	し	て	如	何	と	也	其	効	驗	如
そ	ハ	此	事	は	就	く	ハ	我	等	日	本	人	ハ	得	徳	也	ハ	キ
非	ハ	宜	し	く	直	言	也	ハ	世	上	の	之	を	信	し	難	き	と
ふ	を	蓋	し	前	の	大	輔	等	の	上	書	ハ	日	本	人	の	心	に

を	傷	た	多	る	と	醫	を	へ	ら	さ	る	ハ	至	ら	さ	る	と	
七	甚	大	ハ	し	て	政	府	を	信	を	る	の	心	を	根	よ	り	動
し	彼	維	也	納	と	ブ	ラ	ク	ウ	ド	の	説	世	間	ハ	弘	ま	り
て	日	本	の	大	元	長	官	ハ	粗	暴	り	し	て	恰	狂	人	の	火
推	進	を	ス	如	く	ハ	國	人	の	頼	と	を	る	歳	出	入	の	數
を	弄	せ	り	と	云	評	を	流	布	也	ハ	果	し	て	國	を	愛	
を	弄	者	乎	蓋	し	是	愛	國	の	新	形	有	り					
大	隈	重	信	の	出	せ	る	書	ハ	遺	算	也	我	等	七	其	身	疑
ふ	へ	き	慶	ハ	未	だ	見	さ	る	カ	あ	け	れ	ハ	井	上	馨	の
																		上

財し身し自 我輩のあつ所ハ只ハ國の族也

飛澤局

大正官

財し身し自 我業のある所は只お国の核心

揚	擾	り	を	識	羅	妨	〇	足	き
け	乱	故	施	識	諸	く	〇	を	そ
て	ふ	上	姓	力	國	る	〇	積	や
焼	き	書	へ	を	五	所	〇	込	抑
却	と	人	々	以	八	あ	〇	と	三
を	國	の	々	く	却	き	〇	何	四
る	債	書	々	國	て	者	〇	り	年
と	を	を	々	民	此	万	〇	〇	續
陸	消	駁	は	を	の	手	〇	一	て
兵	却	を	日	其	如	是	〇	〇	〇
の	を	る	本	途	き	決	〇	〇	〇
静	と	茅	々	炭	事	し	〇	〇	〇
證	巨	一	ハ	より	何	て	〇	〇	〇
あ	万	良	純	救	し	機	〇	〇	〇
る	の	件	ハ	ふ	蓋	樞	〇	〇	〇
と	紙	ハ	々	へ	し	よく	〇	〇	〇
海	幣	日	々	き	政	轉	〇	〇	〇
軍	を	本	々	の	府	一	〇	〇	〇
の	引	の	々	策	知	四	〇	〇	〇
糧			々			〇	〇	〇	〇

人	然	詐	り	る	能	を	失	七	八
の	ふ	誦	穴	外	の	能	ハ	謂	親
説	ふ	を	あ	し	長	ハ	何	ふ	孝
の	茲	以	き	大	官	さ	る	へ	行
如	又	て	を	花	悪	ま	り	の	
く	前	國	知	の	人	し	き	故	價
あ	説	人	り	會	世	し	あ	本	を
り	又	其	あ	計	の	人	え	此	を
ハ	反	穴	如	ハ	必	以	と	度	る
日	し	を	他	大	以	て	七	の	母
本	多	蔽	の	穴	政	府	以	書	殺
政	子	ふ	一	何	府	の	ハ	ハ	子
府	一	と	人	り	の	信	算	一	等
如	論		七	一	を	取	を	く	々
何	り		亦	人	る	度	所	妖	々
一	を		悪	ハ	所	本	不	即	々
て	果		人	其	遺	遺	遺	奇	々
ま	集		固	固				怪	々
つ	上		よ	よ				々	々
へ	書								

大正

番

食具

番言

を	の	是	と	板	何	今	の	せ	備
君	録	一	も	出	よ	日	事	さ	を
小	ま	官	可	度	き	繁	情	さ	ふ
自	る	員	あ	出	以	榮	と	ら	と
ら	所	の	り	つ	て	ふ	符	と	工
重	み	久	り	る	知	し	合	部	の
せ	し	く	よ	所	る	て	せ	の	土
ら	て	政	く	の	し	國	り	木	木
る	他	府	心	書	と	歩	上	業	を
へ	人	に	を	の	と	銀	書	を	止
き	の	在	用	誤	と	難	人	を	ま
あ	名	て	ひ	あ	あ	あ	の	所	さ
り	よ	其	始	き	ら	ら	説	の	ら
此	て	名	る	否	る	る	く	書	と
の	出	重	信	ハ	の	の	所	ハ	侍
如	つ	重	を	知	兆	虚	の	よ	の
き	る	者	へ	ら	證	あ	虚	く	背
の	書	者	き	さ	千	る	あ	此	叛
人	冊	者	者	せ	百	ハ	ハ	等	
物	比								

此	の	一	招	也
の	身	く	く	是
如	の	へ	へ	を
時	破	き	様	以
位	滅	様	の	て
置	を	の	書	其
の	招	書	を	書
人	き	世	を	の
み	更	上	世	詐
し	子	み	上	あ
て	重	み	み	ら
六	ね	公	公	さ
月	と	布	布	る
の	國	を	を	を
後	人	る	の	知
み	の	理	理	る
の	耻	何	何	へ
辨	辱	人	人	き
臣	を			ら
の				

財し事とす我紫のちる所は只お國の核

飛騨局

○ 井上聲 以深為一 終毅一 厥と 敬うま

あり 朝の 費せり 識文と 外吾人 見後を
以 批評する事 固より 其あり 知さる 毎
物と 名 敬うま 批判を 加はる 世に 傳へ
る 節り 珍奇の 書たり 此に 固り 其布 方
を 誤ら 其 奥と 窮む 力を 盡し 批判
新を 加へり 日中 凡 巧之 親 景 物 力 資
財し 事 あり 我 紫の あり 所 一 只 外 國 の 旅

集まらば其時を日本に安んずるに
我輩は執心は一回をなすにわして國の
寫字に懐然と人といひたりやそのあつた
と托するに一回の物をも我輩の行も
いまだ口あつたに政令の重官朝政を
識者自らの識をよき紙中と考まきんとい
ふ事と愚者の不他なる久又も我輩と
もそと一かこ一 朝と暮と合まんとを

を我輩と後之能まゆと事殿とあむする
の長中なるかの人を紙に托してそ可
吾の評を世人に告ぐんぬらん國より創之
る甚黒なる跡を我輩と譲す事
心をたりは徹文に連累する二名とを
貴ら下りた物より難しと特を
いふはもめは四想と新例を起しそ利を
とて官制を改定するにそは公義

と、福「あこ」は後文より文字を考へ
と推し必を説評し之を異國に公衆し
其評、猶後言の目と悦まらば人の
こゝろを原るる日本に慮、推して
観る時は心より著述をなるとも
の程し甚しきなり此を以て我輩は
あゝと日本、錢穀の物向と稱する
べきの事情を福とて記したり又此

人々日本人との交際、只好情より債之金に
せざるの源を聞くと道、移りし故、錢穀長官
其國當今と資財公債を記する算計
を精密ならざる、其大略を知るの便を
はる事、謝せざるを得ず故、先ッ批判
の初ニ、議文中載せし、其の闡化進歩し
撃論ハお置き、皇國に債子四百萬兩
則三子萬ポントし、事、其國費其歳

八を越ふるの額を第兩と事政府方令し
體を改革せしむる内外の要必を不測し
問を生じて土崩瓦解拾束せしむる事
至らんとすの事の患を極く恐るる事
情を論せん

ウイチ博覽會日本事務局の少冊より
抜其年々々々思ふ當國の歳入歳費の
細目を載せ年々々々出洋銀三百

四十五兆おれ子七百半七を欲せしむる一
篇の書を著せしむる後、二月前より
そのとおブラリウツド、マゲルズンの書中一條
に題ししたる書とおし書と比較せしむ
る端異なる必有り中雖も歳入の通うに
歳費を越へるに到る同一のものたり右
一條の書ハ物々日本新債を讀むるの
前、著しして其債を讀むたため本

國に遣はるる使臣、女に之を以て
しやうらへるるを考むるに

據り官を著せし事聞えしに
のりたるおし二書に氣の餘款巨多なる
りを亦し一實際をわりのく業を合せり
然るに亦輕ひなき據り錢穀を富の
は放若せし書中より一の年費
現るもの不足有り此供政體を存

セ。國の大患を生んるは此あり

太の次第は此の出入録と云ふものあり哉
米の轉穀を官は放若せし書に
のりたるおし二書に氣の餘款巨多なる
りを亦し一實際をわりのく業を合せり
然るに亦輕ひなき據り錢穀を富の
は放若せし書中より一の年費
現るもの不足有り此供政體を存

此政府の取組むべき大規模の事業
あり政府の金を借りて起す人々の安心を
その詳細を急ぐに先かみんを思ふ
日本人の多くを信託をせしめんとす
我々再之信託し此信義を外國
人に金銀の貸付をせしめんとす
國の進歩の爲に借入し得るは
市買の作を失ふ事なり

百
この大規模の事業を成すに先かみんを思ふ
しめんとす人々の安心を
その詳細を急ぐに先かみんを思ふ
日本人の多くを信託をせしめんとす
我々再之信託し此信義を外國
人に金銀の貸付をせしめんとす
國の進歩の爲に借入し得るは
市買の作を失ふ事なり

満額と他りやしと押入金に財と有利
をいふは色あふは所納額と原金を世
消しあふは巨額を年々と押入を
利息と極なる者の新債を以て現金に
押入納額と一分を消除し能くも
西府の是なり
おと招きたり身より錢數の書中前在^疾
押入金又高きとあるは二千六百七十七元

少行の物もせしむるは此等財本の利を減らすの
拂方なるは或は外の件なる也又外の件なるは
はる納額の原金を消除するは何の件なる也
吾輩もいふは所なり
一は此國全くと信ふは係る年、拂方此
巨額を原金と一方は負欠の漸、消滅するは
漸を施し敷金の内古と領むる所の富を
地稅なる多數の減おをゆるん 是れ此等

為弄權の世のハ、屬する所の能力威權
を以て應せし、英國貴族の遺鑑と
分他の係なきが、所するの力を現金
言及取残金ハ、生涯に自贖還^還する
利息附の返済も、國を求めし
のちりし、たゞし、此を以て諸侯の多く、國弱且
靡ふ重金の、字中の傀儡たり、故に、
の執り、之を和彼せし、予^非難^難なり、
程多、存する、の能力、或控を、り、事

凡百の事跡、多利あり、此を以て之を、利彼
せ、免ん、と、歐羅巴中、何きの國、をも、か、た、
る方、心術、を、勢、し、く、
果、を、こ、する、もの、也、
第二の巨額、之、積、た、る、は、
凡、百、四、百、萬、元、也、
後、の、言、ハ、
三、七、十、の、ハ、
七、十、の、ハ、
ハ、五、百、四、十、萬、元、也、

凡百の事跡、多利あり、此を以て之を、利彼
せ、免ん、と、歐羅巴中、何きの國、をも、か、た、
る方、心術、を、勢、し、く、
果、を、こ、する、もの、也、
第二の巨額、之、積、た、る、は、
凡、百、四、百、萬、元、也、
後、の、言、ハ、
三、七、十、の、ハ、
七、十、の、ハ、
ハ、五、百、四、十、萬、元、也、

五葉の法難歎合一して七葉。子。子。五。也。
右の計五葉なるが。九元。外國人の
約額。或るが。子。子。七。十四元を加申而
る。所際。算。六。子。沙。る。子。四。葉。子。五百
七十四元なり。

法書を五枚。錢教長。二名。の簿。又
照。一。名。の。大。免。且。多。の。簿。長。以。未。に。是。也。
錢教長。信。教。を。ご。出。知。初。を。著
する。か。の。物。を。出。所。を。大。免。也。

前の簿教長。二名。を。後。文。を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
一。小。列。一。名。の。簿。教。長。を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
照。一。名。の。簿。教。長。を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
此。二。名。の。簿。教。長。を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
同。を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
著。其。の。裁。裁。を。論。也。
然。其。の。裁。裁。を。論。也。
を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
を。著。其。の。裁。裁。を。論。也。
お。前。を。創。立。し。て。其。の。裁。裁。を。論。也。

自國の計畫に於て費用は其人
七三二八二二 劉夜 美夕ク

毎半知りて然るに 知り得ぬ及も
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
屬照る也 其の事 不信を傳はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事
其方と穢 其穢を言はるるは 其の事

番外七

六月六日 ガセト

或東京人外國人ニ逢テ話次井上滋澤ノ建言ニ
云ヒ及ホシ其人慨然トシテ曰ク西氏は、如キ
機事ヲ洩スル甚ク非ナリ大藏省ハ我邦最モ樞
要ノ局ナルニ下民ヲシテ其窮耗ノ状ヲ知ラシ
メハ上ヲ戴クノ情ヲ薄クシ大ニ政治ニ害アリ
ト外國人問テ曰ク然レハ二子ノ言ヲ所皆非ナ
リヤ或ハ其言ヲ所實ニ過キタリヤト其人ノ曰
ク否唯其レ非ナラス故ニ洩ラヌ可キナルナリ
ト昔シヒニルニ人朋友ノ呆漢ナリト説き聞

キ憂テ之ヲ其婦ニ告ク其婦之ヲ慰ヒシ
良人果シテ呆漢ナラスシハ人之ヲ譏ル氏憂フ
ルニ足ラスト言ヒケレハ夫ノ曰ク否其言實ニ
余カ弊ニ當ルヲ以テ之ヲ惡ムナリト東京人ノ
事ハ甚ク之ニ類ス

六月七日

ヘラルド

日本大ニ工役ヲ起シテ既ニ多ク金ヲ借リケル
氏未ク足ラス之ヲ費ヤス_ト尚多カルヘシ其鉄
道モ僅カニ端ヲ開ケルノミニテ國內坦平ノ道
ニ迄シク船ヲ入ルヘキ河川ケレハ方今ハ人ノ

未タ考ヘ及サ、ル僻陋ト虽_レ終ニハ鐵竿ヲ鋪
クニ至ルヘシ其他ドック造_ル船ヲ作り武庫ヲ建テ
港門ヲ繕ヒ燈臺ヲ築キ橋梁ヲ架シ氣燈ヲ設ク
ルカ如キ皆欵ク可ラサル事ニシテ其他尚街衢
ヲ修理シ石ヲ敷ク等亦工役ノ急ナル者ナリ概
シテ之ヲ言ヘハ文化ノ國ニ於テハ駁々トシテ
進歩セル間日本ニテハ昏然睡過セル數百年ノ
失ヲ償ハサル可ラス他國ノ隆盛ニ垂涎シ還カ
ニ之ヲ模倣セント欲セバ其費ス所極メテ大ナ
ルヘシ

日本此等ノ金ヲ募ラント欲セハ之ヲ外國ニ借
ルヨリ他策ナシ既ニ再々ニ英國ニ請ヒシニ英
國怡然トシテ之ヲ與ヘ其與フル所請フ所ヨリ
モ多ク且其利子モ亦甚ク低シ
凡日本人ノ外國ニ遊行セル者ハ皆其盛大ニ眩
惑セラレ殊ニ諸工作ノ盛ナルニ膽ヲ奪ハレ其
歸ルニ及テ一意其目撃セル所ヲ我邦ニ移サン
トシ而シテ其驚クヘク羨ムヘキ者ハ富饒ノ大
國スヲ數百年ノ苦辛ヲ經テ始メテ成レル者ナ
ルヲ知ラス又無財無學無識ナル國ノ一躍シテ至

ル所ニ非ルヲ知ラス
藝術ハ萬人得テ學フヘク他人ノ老練ハ得テ情
ナヘキ者ナレバ金貨ハ獨リ然ラス故ニ日本ノ
為ニ謀レハ方策ヲ盡シテ外國ノ財主ニ依安ノ
心ヲ生セシムヘシ財主一旦要路ニ人ナキヲ疑
ヒ或ハ官吏其輩皆之ヲ以テ借典ニシテ金貨ニ屬スルヲ疑フハ宜ク汚穢ニ由テ其金皆奸竊セラル
等ノ疑ヲ生セハ後々金ヲ借ス者ナカルヘキ
近頃井上氏出納ノ計莫ク出セル及政府之ニ吞
フル所ノ曖昧ナル恐ラクハ外國ノ財主ヲシテ
不安ノ心ヲ生セシメシ世ヲシテ日本會計ノ

体ヲ信セシメシト欲セハ必ラス年々信據スヘキ出納表ヲ発行スヘシ且ツ政府ノ歳入必シモ大ニ歳出ニ下ラサルハ分明ニ数ヲ掲ケテ之ヲ示スヘシ
外人ノ惠然トシテ金ヲ出セルハ其金尠多小國ノ益ト為リ多小償ヲ生スヘキ公役ニ用ナルヲ知レハナリ然レハ其現費式ハ全費ヲ調ヘ其工役ニ用フル所ノ官吏及其俸給職務具利金ノ現入或ハ後來入ルヘキ額數ヲ附シ分明ノ表ヲ作りテ発見スヘシ而シテ其表ニ於テハ決シテ隱

避曖昧ノ事アル可ラス然ラサレハ浪費奸竊等ノ弊必ラス生ス凡ソ人ノ行為ヲ世ニ公ケニスルハ此等ノ害ヲ救フノ最良法ニシテ其行ノ人ニ知ラル、ヲ悪ム者ハ大抵私曲アル者ナリ
既ニ起セル諸工役ノ經費入額等世ニ廣マル者甚ク鮮キシ横須賀トク及工場及海岸燈臺等ノ計算発見セル者ナキニ非レハ實ニ短略リ概算ニシテ外部ノ人ニハ解ス可ラス是ノ如キハ之ヲ發スルモ殆ント發セサルニ齊シ然レハ此等ノ工役ハ永久ノ者ニ非ス且其費用ニ限リア

ル者ナレハ尚可ナリ且創立ノ經費ハ久シカラ
スミテ止ム期アリ然レモ機器運用ノ經費ト其
年々ノ入額トハ始終絶ナル者ニシテ他邦ノ諸
工役ト比較討論スヘキ者ナレリ致ク可ナリル
者ナリ

就中鉄道ハ其經費ノ莫大ナル其物ノ必用ナル
共ニ第一ニ位スレモ或ル外國ニストルノ請
ニ由テ作レル粗畧ノ計算ト新聞ニ発行セル毎
週表ノ他ハ世ニ出ル者ナクシテ既ニ金ヲ貸セ
ル者ト又金ヲ貸スノ志アル者ト皆漠然トシテ

詳細ヲ知ルヲ能ハス

唯余カ輩ノ知ル所ハ尤ノ一事アルノミ横濱及

東京^間ノ一道其幅僅カニ三^三ト六^六インケニ過

キス地形ハ平坦ニシテ土堤ハ山崖ヲ截テ之ヲ

築キ狭小ノ河ニ木橋ヲ架シ其ステーションモ亦

粗陋ノ建築ナルニ其費用每里八万田ノ驚クヘ

キニ至リ加フルニ工事濡滞ニテ徒ラニ時日ヲ

費ス間每里殆ント五千田ノ利子ヲ拂ヘリ

是ヲ以テ觀ルトキハ司掌ノ者其器ニ當ラス工

事ヲ利シテ自肥ノ計ヲ為スニ非スマ爾來尚^ホ器

ニ當ラサル者ニ托シ工事ヲ為シノハ恐ラクハ
他日長大ノ鉄道ヲ舗リニ至テ其害甚クシカラ
ニ
方今鉄道ノ形勢ハ極ノテ盛ニシテ未タ貨物ノ
運送ヲキヲ思ヘハ其入額多シト云フヘシ然レ
其運用ノ經費ハ知ル可ラス我輩ニ入額ヲ得レ
ハ又出額ヲモ得サル可ラス然ラサレハ其得失
如何ヲ知ルヲ能ハス唯願クハ日本政府速カニ
創立ノ經費及入額出額ヲ併セテ世ニ示サシ
ヲ欲スルノミ

六月七日 ウーキーノール

日本ノ諸工役ハ其費用何ヲ以テ此ノ如ク大ナ
ルヤ雇錢及物價ハ共ニ廉ナリ而シテ之ヲ監督
スルノ費用モ恐ラクハ印度ノ如クナラズ然ル
ニ鉄道及開拓使ノ經驗ニ據ルニ其費用ニ比ス
レハ成業甚ク少ナシ此浪費ヲ制スルノ法ヲ謀
クルニ非レハ大ニ諸工役ノ進歩ニ害アリ外國
人ノ俸給ト其手ニ費ヤス履トハ之ヲ知ルヲ易
シト虽トモ日本人ノ手ニ費ス履ト其俸給トハ
我曹知ルヲ得ス又之ヲ知ルハ我曹ノ務ニ非

日本ニ於テモ我カオードット、オロックス及佛、ヨリ
ル、デス、カンパデスニ當スル者アリマ、並ニ出納
義余未タ之ヲ知ラスト、虽氏若此設ナケレ、公
財濫出ノ弊アルモ驚クニ足ラス佛、ヨリ、コイル、モ
ス、カンパ、デスハ我カオードット、オロックスニ此スレ
ハ其權大ニシテ出納ヲ監督スルノ全權ヲ握リ
不時ニ官吏及其簿書證券ヲ検査ス余思フニ近
頃井上氏ノ告訴セル冗官ヲ以テ此一局ヲ開カ
ハ大ニ國ノ益ナルヘシ

又近頃建言セル會計局中諸告状ノ一大原因ア
リ會計ノ長官ハ内閣中ニ列セス故ニ内閣ノ議
事アレハ會計ノ長官未タ其事ヲ奉行スヘキ金ノ
有無ヲ算定スルニ及ハスシテ其議先ツ決シ後
ニ至テ會計長官之ニ備フヘキ金ナキヲ言ヘハ
必テス事起リテ雙方何レカ微創ヲ蒙ルニ非
ハ其事決セサルナリ

六月十四日

ウイキレノール

前文略

然レトモ前ノ會計副總裁及其同僚ノ建言ニ曰
 テ政府ヲ激シ歳計ノ概算ヲ公布セシメタルハ
 亦害中ノ一益ナリ其書ノ編者ハ政府中出指ノ
 一員ニシテ固ヨリ政府ノ為ニ臭ヲ掩フノ意切
 ナリト虽トモ又其計実ヲ失ヒ一身ノ名譽ニ
 害アラシコトヲ懼レカク蓋シテ算定シタル者
 ハ其精粗ハ姑ニ措キ大抵ハ憑信スヘシ
 或レ人ハ此書詳密ナリト虽トモ當職井上氏ノ

知ルコト博ク算定精覈ナルニハ若カジト云フ
昔アルヘケレトモ井上氏ノ書中入額ヲ減シ積
数ヲ増シクルハ現ニ世ノ知ル所ニシテ本省ノ
記録ニ合セストテ既ニ點ケラレタルニ非
然レハ今回ノ公布ハ尚憾ハヘキ所アリト虽ト
モ外人ニ在テハ珍重スヘキ書ナリ
第一ニ載スル所ハ田租ニシテ之ヲ四十二十六
万三千五百八十八ト算定ス中建言中定ムル
所ノ平均米價ハ二田七十五錢ニシテ政府中通
常ノ算定ハ四田ナリ然レトモ二田七十五錢ハ

卑キニ過キ四田ハ貴キニ過ク之ヲ三田ト定メ
恐クハ中庸ヲ得テ款ヲ実況ヲ知ル者ハ必
首肯スヘシビニシテ勢帯セル書中載スル所
ノ正税ハ五十九百三十六万三千六百二十五田
ニシテアレキワードニ齎ラス書中ニハ向其数
ヲ増シ六千三百万ト算定ス然レトモ今回四十
二十六万三千田ノ適宜ニシテ且ツ憑信スル
数出テ前ノ二数ハ之カ為ニ生色ヲ失ヘリ但シ
今回ノ数ハ漸々ニ増加スヘキノ勢現然タリ次
ニ数条ヲ起エテ海關稅アリ其数ハ去年ノ計算

ニ從テ定メタレハ今年ハ増加スヘシ鐵道及電
線ノ收入ヲ二十万ト書セルモ亦過カニ真數ヨ
リ下リタレハ鐵道ニ貨物ヲ運送シ電線ノ使用
熟練スルニ至ラハ大ニ其數ヲ増スヘシ也
收入ヲモ亦二十万ト算シタルハ其官給等諸雜
費ヲ歲費ノ中ニ算入シ印紙賣却ノ現額ヲ奉ケ
タル者ナルヘケレトモ稍多キニ過ルニ似タリ
北海道ノ歲入ハ北方ノ漁獵海草等ノ税ニシテ
大抵ハ箱館ニ於テ收納スル者ナリ他ノ諸税ハ
一々詳論スルニ及ハス是等ヲ合シテ

通常歲入四百七百萬六千八百十四十三錢

三

臨時歲入百七十三萬七十二圓五十錢

總計四千八百七十六万三千百八十三圓二十

八錢三十リ

次ニ歲出ヲ論シ第一ニ内外國債年賦消却ノ内
今年ノ分ヲ載ス其數二百六十七万九千百

六圓ヲ載ス此數ハ近年維新ノ間土地ヲ剥レタ

ル貴族豪族ノ俸養錢ナリ然レトモ此數ハ年々
減スヘキ勢アリ且ツ近頃英國ニ於テ金ヲ借り
タル主意若シ真ニ其言ノ如クナラハ之ヲ以テ
華士族ノ祿ヲ買ヒ遠カラスシテ大ニ其數
スヘシ
又注解ヲ待タサル數条ヲ起エテ次ニ諸ノ役ノ
經費二百九十萬圓ト蝦夷殖民ノ用百十七萬七
千三百十二圓アリ余カ輩此等ノ算ヲ是非スル
能ハスト虽トモ箱館ヨリサッポロニ至ル迄ノ新
道竣切セハ大ニ其額數ヲ減メン然レトモ一々

官省ヲ創立スル時ハ年ヲ逐フテ其費用ノ増
加スルコト實ニ驚クヘキ者ナリ然レハ開拓使
ノ費用明年ニ至テ其數ヲ減シ或ハ牧場菜園ノ
收入能ク其會計ニ裨補スル所アラシヤ否ハ余
保スルコト能ハス歐洲ニ四箇ノ公使館ヲ置テ
年々幾シト九萬圓ノ大數ヲ費ヤスハ果シテ已
ム可カラサルコトナリヤ否又外人ノ得テ
ル所ニ非ス然レトモ唯一箇ノ公使館ヲ置テ各
約諸國ノ事ヲ兼督シ時々諸朝廷ヲ回訪セシメ
實際ニ於テ欽ルコトナク且ツ大ニ費用ヲ殺

クニ非スヤ大使及ビ
ノ費ニシテ且ツ吝惜スヘキ者ニ非ス郵便改正
其外諸券書類改造ノ費モ亦些少ナラスト云ヘ
トモ其使用宜ク得ルト否トハ余カ曹新ス
ト能ハス

歳出總計臨時ノ費用二百五十万ヲモ合一テ四
千六百五十九万六千五百十八圓ニシテ歳入四
千八百七十三万六千八百八十三圓ト相減スレ
ハ二百十四万三千六百六十四圓ノ有餘アリ内外
債ノ事ハ追テ公布スヘシトテ今回ハ唯其略ヲ

裁ス唯井上馨カ云ヘル如ク一億四十万ノ可驚
數ニ昇リタルハ誓テナキコトナリト云ヘリ
世人今圓ノ公布ヲ如何シカ視ルヤ之ヲ憑信ス
ルノ浅深ハ如何又之ニ依テ何ノ効ヲ生スルヤ
余此際ニ至テ日本ノ為ニ論子ル可カラハ侃然
忌諱スル所ナク其説ヲ吐クニ恐クハ其精實
ヲ信スル者ナカルヘシ前ノ二總裁ノ建言
ト購フ可カラサルノ害ヲ為シ既ニ世人依安ノ
心ノ根幹ヲ動カシタルニ同一手ニ出タルビ
ニ及テレキハドノニ書ヲ参考スレハ日本

宰臣其職ニ怠リ、全國安危ノ關係セル歳計
ノ窮通ヲモ忽然顧ミサルコト狂人ノ火ニ投ス
ルカ如シト曰フモ亦誣タリトモ僅カニ数年
以前是ノ如キ怠慢ノ臣アラハ直キニ死
其人身ヲ退シ任ヲ解テ一身ノ安逸ヲ謀ラント
欲スレトモ豈得ヘケンヤ今大隈重信カ毎呈ス
ル所果シテ實ニ協ハ、井上氏ノ建言ハ譬ヘハ
孝心ヲ飾リテ其母ヲ殺スカ如ク實ニ怖ルヘク
惡ムヘシ故ニ今回ノ公布極ニテ正確精覈ナ
トモ政府ノ汚名ヲ拭フコト能ハス世人皆曰ハ

前ノ會計總裁既ニ大奸ナレハ今回ノ總裁モ
亦大奸ニシテ政府ノ財政大款漏アリテ一人
ヲ世ニ公布シクルヲ一人又言フ巧ニシテ之
ヲ弥縫スルノミト
然レトモ此論ヲ説破スヘキ一議論アリ是言中
ノ説ノ所果シテ實ナラハ政府今日ニ至ル迄何
ヲ以テ能ク立ツコトヲ得タルヤ薩カニ三
ニシテ一十萬ノ不足ヲ生シ國債一億四十萬ノ
号ナニ至リ而シテ政府尚儼然トシテ動カサル
ノ理アリヤ余ハ決シテ其無キヲ保ス歐洲諸國

如キ民智既ニ開キ國力充實セル地ニ於テハ
能ク此大難ニ堪フルコトアルヘシトモ日本
ニ於テハ決シテ然ラス日本未タ土崩セズ國債
ノ償却未タ壅塞セズ政府能ク措幣ヲ償還シ
既ニ多ク之ヲ燒棄シ陸軍尚命ニ從ヒ海軍ノ俸
給未タ滯ラス諸工役未タ止マス士族未タ反テ
謀ラザルハ即チ建言ノ真ニ非ル明証ニ非ズヤ
今回ノ公布ハ実況ト符合スルコト多シ建言中ノ
説ハ國內昌榮ノ氣象ト反馳スルコト千ヲ以テ
數フヘク非議スヘキ者枚擧スルニ違アラス

今回ノ公布嚴ニ事實ニ合スルト否トハ置テ論
セズ其体裁宜ク得テ且苦心ノ趣自ラ見ハルニ
ツ其書ハ固ヨリ世ニ重名アリテ且ク久シク政
事ニ參典セル人ノ作ル所ナレハ他人ノ手ニ成
リタルヨリモ迫ルニ重信スヘキ者アリ八限氏
ノ名望官爵ヲ以テ僅カニ半歳ヲ出サルニ忽チ
其名ヲ失ヒ再ヒ國ヲ辱シムヘキ妄言ヲ為シ
トハ決シテアルマシキナリ

第二十九号 四枚

八月十四日 ジャパンガゼット抄譯

電報

龍動七月三十一日 龍動ニコレヲ病發セリ

ベルリン六月二十八日 ベルリン府ニ於テコ

レラ病發シ六月二十七日此病ニ冒サレテ死セ

シ者二人アリ之ニ因テ府人大ニ恐怖ヲ念ヲ懷

ケリ

東方ノ傷害者 ニユリ、ヨルク、トリ、ユ、ンニ

曰ク近頃日本ヨリノ郵船ノ便ニテ、進歩

セル帝國ニ於ル會計ノ異聞ト會計事務ノ宰相

井上馨并ニ其同僚ノ建白書ヲ得タリ蓋シ辭職
セル宰相井上馨澁澤榮一ハ帝國ノ會計ノ司ト
リ其職ニ堪フルヲ能ハスシテ止ムヲ得ス辭
職シ帝國ノ信憑ヲ失ハシメシカ為メ其會計ノ
形况ヲ世上ニ公布シテ己ノ怨ヲ洩サントセシ
ヲ疑無シ日本ノ人口ハ凡ソ三千七百萬人ニシ
テ是マテハ人民ノ職業ヲ獎勵セシヲ稀ナリト
雖ヘ凡國ノ資財自ラ乏シカラズ外國人ノ來テ
產物ヲ鼓煽セシ以來日本ノ富饒始テ顯ハレ其
以前ノ形况ハ恰モコロンプスノヒスパニオラ

ヲ發見セシ時ノ如ク職業ヲ營ムノ方法未タ十
分ナラズシテ野蠻ノ風ヲ脱レサリシガ所謂王
政一新ニ由テ國ノ政治上并ニ會計上ノ制度俄
カニ一變シ大名ハ其土地歲入ヲ大政府ニ還附
シ政府ハ大名ノ債ヲ負テ一時ハ混亂極リナク
余輩ノ新聞ニモ他ノ亞墨利加新聞ト共ニ日本
帝國此大變化ノ為メニ會計ノ困難ヲ生センコ
ト論シタリ曰ク大名ハ互ヒニ相競外國ノ海
陸軍并ニ交易ニ用フル機關ヲ買テ外ニ債ヲ
負ヒ御門ハ進歩ノ舉ヲ起シテ之カ為メニ費用

ノ多キヲ必セリト
今余輩ノ論シタル如ク果ノ會計ノ困難生セリ
日新真事誌中ニ會計ノ形況ヲ公布セシ會計事
務ノ宰相ハ勉テ會計ノ形況ノ良カラサルヲ示
シ又其建白書ハ冗長ニシテ比喻華麗ノ言多ク
實ニ東洋ノ體裁ニシテ處々ニ孟子ノ語壟斷利
ヲ罔ス等ヲ云フ并ニ他ノ著述者ノ言ヲ引用セ
リ然レモ其書ハ外國人ニ示シテ日本人ノ歐羅
巴ニ於テ金ヲ借ルノ妨ヲ為サント欲スルノ趣
意ヨリ出タルヲ考フレハ其文ノ巧ミナルヲ亞

墨利加ノ巧妙ナル政事家ト雖モ之ニ過ルヲ能
ハス其書ノ主意ハ日本帝國凡ソ一億四千萬ド
ルラルノ債ヲ負ヒ歲入ハ四千萬ドルラルニシ
テ歲出ハ五千萬ドルラルナルヲ示セリ是レ
其形況ヲ説ク甚タ實ニ過キタリ又之ニ反シテ
日本ハ五千萬ドルラルノ金ヲ備フト云フ説ア
リ殊ニ日本ノ船艦ヲ造リ及ヒ内地ノ便利ヲ達
センカ為メニ費用ノ多カリシハ唯一時ノ事ニ
シテ年々必ラス此ノ如キ費用アルニ非ラサル
ノミナラス或ハ之ニ因テ後來日本ノ歲入ヲ増

スヘキモノアルハ世人ノ皆能ク知ル所ナリ且
日本ノ是マテ成シタル事業ハ千八百年代ノ奇
事ニシテ之カ為メニ多クノ金ヲ費セシハ敢テ
異シムニ足ラス辭職セル會計事務ノ宰相公債
ヲ支消スルノ計畫ヲ為サ、リシハ大イニ其身
ノ辱ニシテ彼等ノ建白書ハ自カラ其任ニ堪ヘ
サルヲ陳フルニ似タリ江戸ニ住スル余輩ノ通
信者ノ説ニ彼等ハ日本ノ一新ノ亂ノ時ニ方テ
國事紛擾ノ際ニ乘シ僥倖ニシテ權威ヲ得タル
者ナリト此言蓋シ信ナラン我合衆國ニ於テモ

他ハ國ノ如ク事情ノ一變セシ時政事上會計上
ノ困難ニ遭ヒタルヲアリ此ノ如キ時ニ當テ不
良ノ徒ヲ其蠹害ヲ為ス地位ヨリ逐出サントセ
シ舉ハ必ラス不良ノ徒ノ抗抵ヲ受ケタリ駁々
進歩スル諸國ノ人民ハ此危急ノ時ニ際シ新ニ
開明ニ向ハントスル舊帝國タル日本ヲ憐マサ
ルモノ無ク余輩憶フニ日本ハ此外國ノ信憑ヲ
損セントスル企ノ為メニ少モ損害ヲ受タルヲ
無カル可シ

井上澁澤奏議ニ關涉スル
諸新史紙枚算

譯

正七位 阿部 泰 藏



日新真事誌第二周年芽卅八號

明治六年六月十七日

論說

曾テ大藏省ヨリ投スル所ノ大藏大輔井上君芽
三等官淡澤君辭職ノ際ニ當リ建言中ニ歳出歳
入ノ高ヲ概算スル歳出ノ多キ歳入ニ不足ヲ生
スル一十萬圓余トアリ亦内外負債ノ総額ヲ計
算高ト巨多ノ差異アル實ニ驚クベキ事ニテ之
ヲ横字新聞ニ出版シ歐米各國ニ送ル一人々之
ヲ者讀シテ其真偽孰レカ是ナルヤ更ニ信憑ス
ル所ヲ失ヒ之レカ爲メ大ニ疑團ヲ生シ物議頗

ル紛然タリ余輩モ其真偽ヲ辨ズル事能ハス外
國人モ日本政府ニ向ヒ論述スヘキ務ニ至レリ
而シテ本月九日三條太政大臣閣下ヨテ公布ス
ル大藏總裁大隈君ヨリ詳密ニ調査スル現實確
然タル正算ノ調書ヲ一讀シテ初テ二君ノ妄說
誤謬ナルヲ信用セリ茲ニ因テ余等中外ノ惑
ヲ解キ以テ喋々ノ物議ヲ消却セシメシメテ眞
事誌第卅五號ニ發兌シ廣ク世上ニ公告セリ抑
此二氏ノ如キハ理財治民ノ重任ニアツテ省務
ヲ統轄擔當スル主職ノ專責ニ居リ一大切要ナ

ル歳出入國債等ノ総額ニ斯ル不明ノ妄說ヲ唱
ヘ公然ト世上ヘ流布セシメ迷然諸人ニ疑惑ヲ
醸成シ政府ノ不信ヲ萬邦ヘ示スハ實ニ驚愕ノ
所為ナラスヤ亦税法ヲ論スル途ニ至リ民心ノ
向背施術ノ當否目下土崩瓦解ノ危機ヲ陽言シ
陰ニ罪ヲ政府ニ歸シ巧辨非ヲ覆ヒ譴責ヲ他ニ
譲リ其唱ル所ノ忠膽誠心何レニ存スルヤ且リ
瓦解ノ危迫ヲ論シ其難ヲ救ヒ身命ヲ抛ケ盡弱
スルヲ專トセス職ヲ辞シ一身ニ保全セントス
是レ豈ニ真ニ憂國者ノ衷情ニ出ル所為ナルヤ

其言フ所ト其行フ所ト霄壤懸隔スル其虛實真
偽孰レニ在ルヤ外國人ノ落意セサル所ニシテ
今日ニ至リ尚紛紜ノ物議消セサル所ナラシ
事件ト違ヒ斯ル切要ノモノハ獨リ政府ノ明暗
ニ響ク而巳ナラス其關係スル所至重ナレハ建
言中ノ各事虛實判然ト裁判セサル可カラス余
輩其事情ヲ聞見シテ之ヲ黙止スルニ忍ヒス世
ノ評論スル所ヲ直言ス乞フ之ヲ顧慮アラニ
ラ

東京日：新聞第百九十七號

明治六年

四月十

投書

嚮ニ大藏省上官連署ノ奏議アリニ公ハ當時ノ
名卿國家ノ計算ニ於テハ殊ニ以テ中外諸人ノ
仰ヒテ肯スル所何ゾ計ラシ著論精覈ナラズ會
計頗ル誤謬多シ終ニ物議洵ニトシテ人民ノ鬼
胎ヲ懷クヲ慮リ歲計盡ク之ヲ既往ニ徵シ會計
概表ヲ製シ普ク中外ニ頒布シ隱忌スルナラズ
蓋シ爲ニスル有リ故ニ立算精密薄ク入ルニ計
リ厚ク出スニ充ク是爾後万モ去誤ナキヲ要ス

ル者ニテ公正ノ中用意徹底スト云ベシ表中内
外ノ國債ヲ載セ又償却ニ於テ一處法アル事ヲ
緒言ス且ツ預備臨時度支ノ外二百萬圓ノ齎餘
ヲ示サル出入度アリ會計法存スト云ト雖此國
家預備外是等ノ儲藏無ルベカラズ是亦關如ス
ベカラザル者ナリ聞ク歐洲各國外債ノ多寡ヲ
以テ國ノ隆替ヲトス他國ノ財ヲ使用シテ城が
大利益ヲ興起スル猶巨賈富商ノ他家ノ預り金
ヲ領シテ自家若子ノ益ヲ爲スカ如シ是名望已
ニ信憑スルニ足ラ而シテ使用其術ヲ得ルか故

ナリ本資ノ錢財ヲ乞貸シテ却テ衣食ノ滯費ニ
供スルノ類ニアラズ我邦文明日ニ進ムモ未タ
外債ニ頼テ生ズルノ巨利ヲ見ズ他日ハ姑ク議
セズ今ニシテ察スルニ蓋シ外債ハ無キヲ以テ
善トス幸ニシテ償還ノ法立ツ豈國家ノ福ナラ
ズヤ先日敗戦ノ法國億萬ノ償金ヲ負フ國人力
ヲ合セテ消却スル三四月ヲ經ズ是償金ハ辨給
セガルベカラズ又シテ償ハズ利子累々徒一人
ノ國ヲ殖ス歟夫收登モ自國ノ弊害タル所以ヲ
審知ス故ニ巨債ヲ一時ニ償還ス民智ノ開明此

至ル者實ニ盛ナリト謂ベシ仍テ今此ノ表ヲ
按スルニ内外數種ノ債償却ノ法十年乃至二十
年ヲ須ニベシ内債ノ如キハ官庫耗ス處内國ニ
止ル其財民間ニ融通ス外債ハ然ラズ五百五十
餘萬圓ノ多寡利子年ニ卅萬餘之ヲ消却ス亦十
五六年ノ歲月ヲ經ベシ利子年々ニ減スルモ年
月ノ又シキ應ニ二百餘萬圓下ラズ此金一度海
外ニ去ラバ名ハ官庫ノ耗ニシテ實ハ全國内ノ
二百万圓ヲ欠損ス其害如何ゾヤ雖然多端ノ政
府一旦ニ償還スベカラス而シテ政府ノ人民ニ

求ル事ヲ得ガル者ナリ是則我人民ノ文即亦々
佛國ニ及バザル者一步ナリ亘ク發憤協同シ氣
カラ用ヒテ償還ノ方法ヲ計リ政府ヲ補テ富
強ノ基ヲ堅メ開化ノ民タルニ耻ナキヲ要スバ
シ五百万圓之ヲ全國三千五百万口ニ課ス一名
僅々十五錢有奇ニシテ此ノ金額ヲ得ヘシ人民
ノ國ニ報ナルノ公道ナラスヤ苟モ餘資アル者
恤窮ノ意ヲ存セバ貧困モ亦隨テ去明ノ域ニ進
ミ報本ノ道ヲ得ルニ近カラニ拙劣ノ言敢ニ江
湖ノ賢哲ニ質ス

横濱毎日新聞第七百六十號明治六年六月十六日
豊岡縣第十五大区ニ長兼地券掛附屬梅垣西浦
ナル者家貧而性倜儻區長中頗ル慷慨家ノ種ア
リ去年中區長ノ命ヲ拜スル爾來家計ノ為メニ
公事ヲ欠カン事ヲ畏レ家ヲ弟某ニ譲リ獨リ妻
孀ヲ携ヘ便直ノ地舞鶴町ニ轉住ス今年六月初
旬ニ至リ宮津支廳ニ在テ先般井上澁澤ニ氏奏
スル所ノ裁出入ヲ議シ年々一十萬圓ニ下ラス
云々ノ説話ヲ聞キ切齒扼腕シテ曰ク是邦家ノ
一大事豈臣子ニシテ傍觀默視シテ可ナランヤ

然ルニ金玉ヲ献セント欲スルモ家貧ナルヲ如
何セン計策ヲ奏セント欲スルモ智識ナキヲ如
何セン夙夜憂慮措ク能ハカルナリ一日自ら思
フ裁愚蒙ニシテ終ニ良策ナシ顧フニ裁ニ區
長ノ月給アリ地券附屬ノ月給アリ之ヲ算スル
ニ一歳僅ニ百三十二圓ニ過キズ然ルモ其金額
ノ少ナル毫モ耻ルニ足ラズ其微衰ノ切ナル聊
カ表スベシ裁カ奉職中之ヲ奉還シ以テ聖恩ノ
萬一ニ答ヘニ耳裁貧ト雖モ尚ホ飢渴ヲ免シ生
命ヲ保ツ善餘アリト遂ニ具願表ヲ記載シ以テ

縣廳へ出願セリ庶務課之ヲ指令シテ曰久愛國ノ衷情感入云々井上等西氏ノ建言中皇國負債歳出入等ヲ論スル件不都合不少趣ヲ以テ正院ヨリ書面差返サルニ付此等ノ儀ハ憂ルテ勿レ且政府ニ於テ不給ノ人ヲ使フノ理ナシ云々至誠ノ衷情即刺長官迄言上及フ云々遂ニ上書返却セラルト云爾嗚呼梅垣氏避陰ノ一區長ニアラズヤ而シテ具為ス所ノ卓絶ナル已ニ既ニ此ノ如シ以テ流俗人ノ耳目ヲ聳驚セシムルニ足ル然リ而シテ梅垣氏徒爾之ヲ為ヌ者ニ非ス多

年蓄積ノ衷志一旦事上ニ蒸發シテ能ク出ル如シ古人モ亦言ハスヤ本立而道生スト志ハ本ナリ事ハ末ナリ志ノ發スル所之ヲ名ケテ事ト為ス未タ嘗テ其志ナクシテ能ク具事ヲ成ス者アラズ願フ世上ノ君子徒ニ金玉ヲ奉獻スルヲ以テ貴トセス愛國ノ赤心ヲ立ツルヲ以テ貴トセシ事ヲ文字拙劣ヲ辞セス希世ノ真説ヲ報セシト欲スル者ハ豊岡縣下本町ニ住スル坂某ナリ

日新真事誌第二周年四十一號六月二十日

論說

大藏省事務總裁大隈君カ政府ニ上書セシ輸出
入ノ一書ヲ當新聞ニ掲載シテヨリ余等之ニ因
ラ省官ノ投ズル正説ヲ見ント希望スル已ニ三
四日ニ至ル而テ未タ曾ラ具説ヲ得ガルヲ以テ
敢テ自己ノ愚考ヲ述ベシ彼書タル全件皆肝要
ニシテ從來日本新聞紙ニ記載セル事件中ニ就
テ最大切ノ者ト云フベシ故ニ彼書ヲ讀ム中外
人民ハ大ニ井上澁澤両氏ヲ擁斥ス而テ余等亦

両氏ヲ閣ヲ論議セザル能ハズ如何トナレバ彼
等ガ違自國ヲ醸成スル國辱一曰ニシテ之ヲ洗
滌シガタケレバナリ井上ノ献白及ヒ大隈ノ上
書ニ付テ關係スル事件ハ實ニ廣大ニテ諸省官
モ忽々之ヲ理解スルニ至ラン井上等政府ニ書
ク献セシ所以ノ本意ハ余等今茲ニ贅セズト雖
モ彼等ノ罪ハ必ス司法省ニ於テ裁断アル可キ
ナリ且其裁決律例ヲ論スルハ新聞家ノ職務ニ
アラザレハ暫ラ裁断アルヲ待テ後其可否ヲ
辨駁スベシ余等今只管大隈君ノ上書ヲ信ス而

テ之ヲ信用スベキ所以アリ第一ニ彼書大隈君
ノ名ヲ保シ此大藏事務總裁ノ名譽ハ今茲ニ贊
スルヲ俟タズシテ其德既ニ昭々大塚ヲ之ヲ稱
シテ正直其任ニ堪ユル人物ト為ス彼ノ上書中
ニモ既ニ其名ヲ手記スルニ依リ之ヲ看讀スル
人カハ深ク其説ヲ信用ス是ヲ以テ已ニ紛々
ル世議モ漸クニシテ和辭スルニ至ル
井上氏大藏省ニ於テ奉職セシヤ已ニ又シテ其
職ヲ辭スルノ際建白書ヲ政府ニ呈進ス其心ヤ
誠忠ヨリ出ルニアラスシテ忿怒ヨリ出ルモノ

ナラントス而シテ大隈君モ亦其事務ニ於テ意
策ノ潔白ナラザルモノアルカ若シ果シテ然レ
日本國ノ大事ニ至レルマ必セリ然レモ大隈君
ハ固ヨリ良臣ニシテ其品行ニ於ルモ亦實ニ信
スベキナリ而シテ如シ同氏ノ政府ニ上ル歳出
入ノ高不正アルハ其ハ綿密ナル計算ヲ得サル
者ニテ中外人民ノ信用ヲ失ヒ且其恥辱少シト
セザルベシ吾輩ハ彼書面ノ趣ヲ以テ信用シ且密
疑ヲ辭ケリ既ニ横濱ニ於テ外國人皆此書ヲ以
テ確證トナスベシ今若シ英亞各國ニ於テ斯ノ

如キ事件アルキハ其人民必々井上氏ヲ以テ大
隈君ニ答應ヲ爲サシム可シ且如何ナル道理ニ
ヨリテ兩氏其歎白ヲ爲セシヤ判然此儀ヲ示サ
ンテヲ乞ハン大隈井上兩氏ヲシテ詳ニ各上書
ノ意ヲ辨明スルニアラサル迄ハ其可否ヲ決ス
ルテヲ得ス且兩氏其任ニアリテカクテ國
家ニ致シ共ニ罪科アルニアラレハ兩氏其ニ
其算計表ノ原據ヲ示シ以テ大隈氏上表ノ可否
モ亦辨論スヘキナリ三氏ノ上表ニ依テ新ニ歲
出入及收稅國債ノ正莫ヲ守内ニ公告シ其事實

ヲ明論セシテ以テ余等ノ宿念漸クニシテ其一
ヲ得喜躍自ラ止マサル處ナリ因テ斯ノ如キ事
件ニ處スル方法ヲ以テ日本國民ニ告ク

香港華字日報 一百七十七號抄 東京日新新聞 七月三日

日本ノ戸部尚書大藏省長官ヲ云ノ近日辭職
退隱セラレシ時ニ其國政事上ノ得失ヲ論シテ
新聞紙ニ載セタリ其說ニ此節官庫空虚トナ
リ外債彌高々民間ヨリ重キ租稅ヲ取立タリ
民民ハ只日ヲ送テ困窮ニ下、脂膏ヲ絞リ取

リ上、厚歛ニ充ルルニ日本ニハ洋法ヲ崇ヒ國ヲ
治ルヨリ家ヲ齊ル迄何事モ西洋式ヲ用ヒテ却テ無
益ノ虚飾多シ在官ノ人時世ヲ考ズニ張大ヲ計
リ法ヲ施ス一ハゲシク仕上ダニ遲キヲ恐レテ事理ノ
當否ヲ察セサル也コハ此儘ニ在ルベカラズ無用
ノ費ヲ考サズ此迄起セル者モ効ナキハ四能ベキナリ
論スル所此ノ如シ論者曰經濟ノ道ハ國家ヲ有
シ者財ノ乏キヲ患ヘズシテ富ムルニ目キヲ得ル
ノこと

別録

六月二十五日刊刻横濱ニヨル止新聞抄譯
初代那破翁曰ク魯人ヲ擽傷シテ其肌膚ヲ見ル
時ハ純然タル藪人多ク免レズ開化尚ハ未タ完シト
スベカラス今日日本人ヲ見ル之ト一様ニ論スベカラス夫レ
日本人ハ他人ノ手ヲ要セズ自ら表皮ヲ擽傷シテ時々
其醜態ヲ表ハスヲ以テナリ嚮キニ大使文明ノ各國ニ
使スルヤ一ハ各國トノ約定ニ付外國人ヲ日本ノ法律ニ
服從セシメ之ヲ裁判スルニ日本ノ裁判ヲ以テスルノ
約定ヲ得ントスルノ趣旨ナリ爰ニ政府各府縣
ニ公布ニシテ罪人ノ糺彈ニ拷問ヲ用フルノ權ヲ與ヘ

タリ元來日本ニ於テハ罪人證人ヲ処分スルニ具罪證ヲ
得ルト甚ク難ク因テ或ハ之ヲ感動セシメ或ハ恨意ヲ
示シ或ハ唯其怯懦ニ因テ其證ヲ得ルノ奮習アリ余
輩元ヨリ之ヲ了知ス然レ今般政府改テ三條太政大臣
實義ノ名ヲ以テ糾弾榜問ノ公布アルハ畢竟其用
何ヲ爲スヤ唯裁官ヲ挑撥シテ旧來ノ榜問ヲ尙刻
烈ナラシメ不寧ニシテ其手ニ掛ル罪人ヲ困苦セシム
ルニ過キズ因テ意ヲニ加此公布ハ文明ノ各國ニ於
テ甚ク殘虐ノ所爲トスルヲ三條公及ヒ日本政府ハ全
ク知ラサルト決シテ疑フ可カラス日本政府ヨリ如此惡

習ヲ再許セシハ實ニ無用ノ贅言ト云ベシ蓋日本
政府ニ於テハ外國人モ同様奸邪惡逆ノ證人ニ掛リ
無智不肖ノ裁官ノ糾弾ヲ受ル時ハ榜問ヲ以テ
処分セラル、トテ自ら許ス可キトテ歎スルノ理ナシ
ト云ベカラス今テ日ノ時世ニ至リ日本人爰ニ注目シテ
之ヲ新聞紙ニ出シ廣ク地球上ニ流布スルヲ許ス
時ハ實ニ政府ノ議官智カヲ欠クノ一典ト云ヘキカ
誠ニ歎スベキノ一ナリ又各國公使ヨリ此公布ニ附キ
尙ホ各私意ヲ附シテ之ヲ其本國ニ報信シ外
國ニ於テ日本人ノ約定中ヨリ外國人國外ニ在

テ裁判スルノ權ヲ削却セントスルノ意ニ違フ能ハサル
ヲ通スベシ佛國暴ナリト雖モ謗評誹議ノ為ニ漸ク
緩ナリ今日本佛律ヲ見テ拷問ヲ知ラリト雖モ其名
目ヲ存スル内ハ外國人尙之ヲ快シトス力ラズ當時日
本於テ佛律ト日本拷問ノ兩律ヲ存在ス

別録

各府縣ニ於テ罪人紮彈ノ節其模様ニ因リ拷問ヲ
用ユルヲ苦シカラサル趣ノ公布昨日出版ノ日新真
事誌中ニ三條太政大臣實美ノ名ヲ以テ記載セリ余
輩之ヲ見ルヲ遺憾トス

故ニ吾々新聞紙ヲ以テ日本政府ニ事ヲ明告ス
ル者ハ如此キ方法ハ畢竟野密ノ所為タルヲ宜
シク日本政府ニ説明アリクキナリ此紮彈ノ法ヲ除カ
サル内ハ未タ日本人開化ヲ以テ自ら誇ルベカラス

歲出入取調書

Vertical columns of handwritten text in a cursive style, enclosed in a red border. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Vertical text on the left edge of the page, including characters like '大' and '改'.

Vertical text on the right edge of the page, including characters like '大' and '改'.

各省使府縣

前大藏大輔井上馨同三等出仕滋澤榮一前日差
出候建言中謬誤之廉有之候一付歲計概算更一
精密取調候様大藏省事務總裁參議大隈重信一
無一相違置候處此度別紙之通取調差出候一付
為心得此段相違候事

明治六年六月九日 太政大臣三條實美

大藏省

參議大隈重信謹テ
太政大臣閣下ニ白ス曩ニ前大藏大輔井上馨全
三等出仕澁澤栄一カ辭職ニ臨ニ閣下ニ上ル所
ノ建議其論固ヨリ憂國ノ表情ニ出ルト雖也措
辭實ニ過キ議論激ニ起ヘ且歳出入ヲ計ルニ至
テハ多ク臆測ノ概算ニ出ツ是閣下ノ其書ヲ黙
テ採用セサル所以ナリ然而シテ誤テ新聞紙
刊行セシヨリ中外人民其主職ノ上書タルヲ以
テ固ヨリ真確ナルト信シ大ニ紛紜ノ物議ヲ
生スルニ至ル重信現職大藏ノ總裁ヲ辱クス特

大藏省

大藏省

ニ其會計實況ノ當否ヲ辨明スルニキ、欽命ヲ奉
セリ於是テ其省ニ就キ其主職ノ官貞ニ審問シ
其簿記ヲ查覈シ實額ヲ計算シ乃チ別記ノ正數
ヲ得タリ因テ簿録上呈ス抑モ財政ハ皇國安危
ノ關係スル所苟モ其當ヲ悞シハ不測ノ患害ヲ
醸ス丁彈指ノ間ニ在ルヤ固ヨリ論ヲ俟サルナ
リ然ルニ今二氏ノ論スル所ノ如クナレハ我政
府ニ對シ中外人民ノ信憑依頼ヲ薄クシ是カ為
メニ疑惑ヲ生スルニ至ラン然ル時ハ其關係ス
ル所亦大ナリトス故ニ切ニ望ム今録呈スル所

ノ歲計表ヲ遑ニ中外人民ニ公布シ以テ其疑惑
ヲ解キ其物議ヲ止ニ丁ヲ誠恐ノ至ニ堪ヘス

一此歲入ハ近年ノ收納ノ科目ニ準據シテ今後
周年ノ稅額ヲ計上シ其收入ニ得ヘキノ大數
ヲ舉クルモノナリト雖モ既往ハ實際之レヲ
收納スルニ及ンテハ未納或ハ延納其他種々
ノ通弊アルヲ以テ常ニ其額ニ充ツル能ハサ
ルコトアリシナリ然レモ今ハ實際上ニ付テ
監督ニ如此ノ通弊ヲ釐正シ萬緒其序ヲ得

ルニ至ラントスレハ歳入ノ額ハ増加スルニ
減損スルノ理断ヘテナキナリ

一此歳出モ亦前年ノ科目ニ因據テ計上セシ
ナレハ今後ニ至テモ大ナル差異ヲ生スルコ
トナルハシ然レモ定數ノ費ハ省冗節制シ百
般其序ヲ得ルニ至テ必ス減省スヘキモノナ
リ然リ而シテ臨時失費ノ如キハ豫算シ得難
キモノナレハ其額或ハ之ヨリ増加スルヤモ
難測モノナリ然レモ歳入ノ歳出ヲ償フ能ハ
ザルノ害ナキハ決然疑ヘカラサルナリ

一先次倫敦ニテ告知セシ我歳入歳出ノ表澳國
博覽會ニ我公使ノ携帶セシ表及ヒ今此ニ掲
クルモノト歳入歳出ノ金額相異ル所以ヲ辨
明セン抑我邦ヤ各外邦ト異ニシテ庶民ヨリ
納ル所ノ租稅多クハ米ヲ以テスレハ其米
價ノ高低ニ因リ出入ノ額ニ於テ大ナル差異
ヲ生スルナリ實ニ今年ノコトキハ米價低下
ノ極度ト雖モ猶今此ニ揭示スル金額ノ歳入
アリ又近時ノ如キハ辰巳兩度ノ戦争及ヒ廢
藩立縣ノ改革ヲ施行セシナリ其賞莫大ニ

=シテ二三ヶ月間ノ算計ニモ亦大ナル
 差異ヲ生セシナリ又税法更正ノ際大ニ收納
 額上ニ差異ヲ生セシニ因テナリ今ヤ廢藩
 五縣ノ舉モ熬ヒ其序ニ就キ税法ノ釐正モ其
 端緒ヲ得ルニ至シナレハ
施行シ人民所有タルノ確據ヲ得セシメ且從來ノ米納ヲ廢シ全納ノ税
 額ニ整正スレハ米價ノ高低ニヨリテ歳入ノ増減ナキ等ヲ云フ 歳入ノ税
 日ニ増シ月ニ加ルニ從テ起手ノ事業モ大ニ
 増加スヘシト雖凡歳入ノ歳出ヨリ多キハ論
 ヲ待サレナリ
 一今此ニ掲クル定費臨時費ノ如キハ素ヨリ確

定ノ數ニハアラス今ヤ創業ノ際新タニ着手
 スヘキ百般ノ作業則チ輟路ヲ設ケ燈臺ヲ築
 キ電線ヲ架シ諸般ノ工場ヲ開設シ或ハ官廳
 ヲ造営シ陣營ヲ建築スル等ノ費用ヲモ計上
 セシモノナレハ明年歳出ノ額減損ナルコト
 必然ナリ上ニ掲クル件々ノ如キハ一時成功
 ノ上ハ年々新建スヘキモノニアラス唯修繕
 ノ細費ヲ要スヘキモノニシテ又夫ヨリ生ス
 ル利益アルヲ疑ヒ然ラハ追年歳出ハ減シ
 歳入ハ加ルニ至ルヘキナリ
 一歳入ノ額不

且ノ事アルトキハ上
付緩急輕重ヲ計リ箇裏ノ緩輕ナルモノヲ次
年ニ譲リ得ルコトナレハ到底歳入ノ歳出ヲ價
フ能ハサルノ害ナキコトヲ重言スルモノナ
リ諸事ノ成功及ヒ其費用ノ如キハ次年ニ出
ス處ノ表中ニ於テ明了ニ揭示スヘキナリ
一國債ノ如キハ内外ノ兩債ヲ負フト雖モ外債
ヲ償フニハ諸族ノ祿制ヲ定メ有餘ヲ以テ不
足ヲ償フノ規ヲ設ケテ以テ之ヲ支消スルノ
一處法アリ又内債ノ如キハ之ニ充ルモノ

アリ則チ政府ヨリ庶民ニ貸出セシ金穀ナリ
又紙幣ノ発行アリト雖モ之ニ充ルニ準備
金ト稱スルモノニシテ大藏省ノ倉庫中ニ藏
蓄セシモノアリ此三條ノ分明ナル解説ハ不
日精細ニ調査シテ公布スヘキモノナリ

改
官

明治六年歲入出見込會表

歲入之部

第一正租 總計金四千百萬六千四百四拾八圓貳拾八錢三厘

內譯

田租 金四千貳拾六萬三千五百八拾八圓六拾錢

三府地稅高賣
免許稅其外 各種鑿札稅 金三拾壹萬六千貳拾三圓六拾八錢三厘

各種鑿札稅 金三拾三萬五千圓

船稅 金三萬四千圓

婢僕車馬稅 金六萬三千貳百三拾六圓

第二印紙稅 總計金百三拾萬圓

第三酒類其外各種稅 總計金貳百拾三萬七千六百四拾壹圓

內譯

酒類稅 金七拾七萬四千圓

絞油稅 金五萬五千圓

砂糖稅 金貳拾八萬七千七百七圓

各種稅 金百貳萬九百三拾四圓

第四海關稅并諸稅 總計金百八拾貳萬三千九百九圓

內譯

東京 金四千六百八拾四圓

橫濱 金百貳拾七萬八千八百八拾壹圓

次官

兵庫

金三十萬五千三百三拾圓

大坂

金八萬九千三百三拾圓

長崎

金拾五萬三千七百貳拾三圓

新潟

金四百四拾九圓

第五郵便稅汽車電信收入 總計金四拾萬圓

内譯

郵便稅

金貳拾萬圓

汽車電信收入

金貳拾萬圓

第六北海道收納高 總計金三拾三萬八千八百拾貳圓五十錢

内譯

產物稅

金三十萬壹萬圓

海關稅

金貳萬貳千圓

正租雜稅

金六千八百拾貳圓五十錢

第七臨時種々ノ入高 總計金百七拾三萬七拾貳圓五十錢

内譯

貸出金及利息

金百貳拾貳萬千九百八拾貳圓五十錢

欠所物其外拂下ケ

金三十萬八千九拾圓

贓贖金

金貳拾萬圓

通計

通常歲入

金四千七百萬八千九拾圓七拾貳錢三釐

次官

通計

臨時歲入 金百七拾三萬七拾貳圓五拾錢

歲入總計金四千八百七拾三萬六千八百八拾貳圓貳拾八錢三釐

歲出之部

第一國債消却 總計金貳百六拾七萬九千百圓

內譯

無利息ニテ元金ヲ 債還スルハキ内國債 金五拾萬八千七百圓 明治五年分

利息ト共ニ元金ヲ償 還スルハキ内國債及利息 金百拾萬四百圓 同上

一時償還スルハキ 内國債 金貳拾五萬圓

外國債

元金四拾五萬圓 利息金三拾七萬圓

第二 貫屬家祿 賞典米 總計金千貳百六拾壹萬三千八百拾六圓三拾五錢五釐

第三 營繕堤防 總計金四百萬圓

第四 外國交際 總計金拾萬六千四百拾圓

第五 太政官 總計金三拾三萬圓

第六 各省使 府縣 總計金貳千三百三拾五萬五千六百七拾貳圓拾錢九釐

內譯

外務省 金拾六萬八千七百圓

大藏省 金八拾九萬三千四百九十九圓

陸軍省 金八百萬圓

海軍省	金百八十萬圓
文部省	金百三十萬圓
教部省	金五萬圓
工部省	金貳百九十萬圓
司法省	金六十三萬圓
宮內省	金六十四萬三千五百五十二圓六十錢九釐
開拓使	金百十七萬七千三百十二圓五十錢
三府	金八十萬三百四拾壹圓
諸縣	金貳百九十九萬貳千貳百六十七圓
第七府縣捕亡及邏卒費總計	金八拾五萬圓

內譯

三府邏卒	金五十七萬九千三百十三圓
各縣捕亡及邏卒	金貳拾七萬六百八十七圓
第八米英佛澳公使館	金八萬九千貳百圓
第九紐育外六港領事館	金貳萬百六十圓
第十臨時歲出總計	金四百五十五萬七千三十圓

內譯

大藏省郵便改正舊藩楮幣引換
 改造及國債證書製造其外
 特命全權大使
 各洲巡行

金百六拾四萬貳千六百圓
金拾七萬貳千三百圓
金貳拾四萬百三十圓
澳國博覽會

文部省

一般臨時費豫備 金貳百五十萬圓

通計

通常歲出 金四千貳百三萬九千四百八十八圓四十六錢四釐

通計

臨時歲出 金四百五十五萬七千三十圓

歲出總計 金四千六百五十九萬六千五百八十八圓四十六錢四釐

歲入總計 金四千八百七十三萬六千八百八十三圓二十八錢三釐

歲出總計 金四千六百五十九萬六千五百八十八圓四十六錢四釐

歲入、歲出ヨリ多キ高

金貳百十四萬三百六十四圓八十一錢九釐

國債

內國債

有利呈債金千三百七拾五萬五千八百七十三圓

無利呈債金千二百七拾一萬八千四百七十八圓

合 金貳千六百四十七萬四千三百五十一圓

內

金七拾五萬八千七百圓

年賦、內明治五年六年分並一時
支消、分共本年償却、高

殘債金貳千五百七十一萬五千六百五十二圓

明治七年以後可償却分

外國債

債金五百五十萬九千五十圓

合內外國債三千百二十二萬四千七百壹圓

御布告案

本年六月九日布達ニ及候歲入出見込
會計表中誤寫有之左之通正誤候条
此旨相達候事

正誤

一通常歲出金四千二百三万九千四百十八、四千二百
三万八千五百、誤
一歲出總計金四千六百五十九万六千五百十八

四千六百五十九万五千六百ノ誤

一 歳入ノ歳出ヨリ多キ高金貳百十四万三百ノ
二百十四万千二百ノ誤リ

一 此歳入ハ経年ノ税額近時ノ納科ニ準據
メ計上シ其收入シ得ヘキノ大數ヲ挙ケル
モノナレハ必ラス此數ヨリ減却スルノ理ナシト
云モ實際之レヲ收課スルニ及シテハ未納或ハ
延納其他種々ノ通弊アルヲ以テ嚴ニ督責
ヲ加フルモ常ニ其額ニ充ツル能ハサルモノアリ
是累歳ノ實驗ナリ故ニ歳入ノ額ハ此ヨリ
致損スルナアルモ決テ増加ズルナシ
一 此歳出ハ已ニ定額アルモノ又ハ定額ナキモノハ

前年ノ比較ニ因據メ計上ス是亦大ニ差
謬莫カル可キニ似タリ而テ臨時費出豫知ス
可カラサルモノ又ハ算計ノ差違アルヲ免レサル
モノ其他一周年間ノ實際上ニ於テ常ニ
冗費アルアリ故ニ歳出ノ額ハ之レヨリ増加ス
ルアルモ決テ減少スルヲ能ハス

一前二條ヲ以テ推考シ出入ヲ比較スルニ
今日ノ計上歳入ニ有餘ヲ見ルニ似タリト
モ實地之ヲ施行スルニ及ンテハ必ス歳
入ノ全額ノ遺漏歟損ヲ生シ則テ恐ル費

出頻リニ急ヲ告ケ上入却テ足ラサルヲア
ルヲ若シ過テ是ノ概算ヲ確數ト見テ直ニ
國家會計ノ目途ヲ立ツレハ理財上ニ
於テ必ス不測ノ大害ヲ醸生ス可シ

大藏省事務總裁

參議大隈重信

全三等出仕

正五位陸奥宗光

自明治六年一月一日
至同 十二月三十一日

金穀歲入概表

大正

大正

歲入

全國高三千百六十二万石余

正租及高大繩場雜稅

金四千〇二十六万三千五百八十八圓六十錢

內

米八百壹万〇四

此代金二千二

但米

此代金二千二...
米八百壹万〇四...
正租及高大繩場雜稅...
全國高三千百六十二万石余...
金四千〇二十六万三千五百八十八圓六十錢

歲入

全國高三千百六十二万石余

正租及高大繩場雜稅

金四千〇二十六万三千五百八十八圓六十錢

内

米八百壹万〇四百十二石二斗七升七合六勺

此代金二千二百〇二万八千六百三十三圓七十六錢三厘

但米壹石三付金二圓七十五錢、積

米八百
代金
本文
金

歲入

百六十二万石余

繩場雜稅

十六万三千五百八十八圓六十錢

方〇四百十二石二斗七升七合六勺

二千二百〇二万八千六百三十三圓七十六錢三厘

但米壹石二付金二圓七十五錢ノ積

本
文
官

大
政
官

米八百壹万四百十二石二斗七升七合六勺
代金二千三百五十二万三千三百七十四圓九錢壹厘

但壹石二付
金二圓九十三錢六厘三七五厘

本文ノ差引
金百四十九万二千七百四十四圓三十二錢八厘

増

金千八百二十三万四千九百五十四圓八十三錢余

内金五十三万圓

烟永及安石代改正增見込

東京府下稅

金十七万七千七百四十二圓六十八錢三厘

内金四万圓

地稅見込

洋銀百五十弗

大阪府下稅

金十萬九千五十五圓

内金二万圓

地稅見込

京都府下稅

金二万三千六百七十六圓

内金壹万圓

地稅見込

造酒醬油稅

金七十七万四千圓

絞油稅

金五万五千圓

船稅

金三万四千圓

蚕種紙稅

金二十万圓

牛馬鑑札稅

金五万圓

諸掛物 延米口米代金口永之類

金九十万千二百四十圓

國役金

金十壹万九千六百九十四圓

各港諸稅

金百八十二万三千九百九圓

丙

金四千六百八十四圓

東京

金百二十七万四百八十壹圓

横濱

金三十万五千二百三十八圓

兵庫

金八万九千三百三十四圓

大阪

金十五万三千七百三十三圓

長崎

金四百四十九圓

新潟

郵便税

金二十万圓

印紙税

金百万圓

生糸印紙類代金

金十万圓

生糸鑑札税

金二十二万五千圓

鳥獸獵鑑札税

金六万圓

車馬婢僕稅類

金六萬三千二百三十六圓

砂糖 琉球其外稅

金二十八萬七千七百七圓余

但老斤二付代金四錢四厘

金貳千四百四十三萬九千二百十四圓五十毫錢三厘

合計洋銀百五十弗

米八百壹萬〇四百十二石二斗七升七合六夕

此金二千三百〇二萬八千六百三十三圓七十六錢三厘

年割上納

金十五萬圓

年賦債附

金三十五萬八千四百三十圓

贖罪金

金三萬九千圓

富岡製米場利益

金五千三百四十圓

此分減又

第一大區醫學校

金八千九十圓

瀨車傳信機

金二十萬圓

雜科

只所物其外諸拂物代、類

金三十萬圓

貸出金穀返納

金六十五萬二千百五十二圓五十錢

洋銀四百弗

丙

金五十九萬七千三百七十八圓

洋銀四百弗

米壹萬九千九百十八石

此代金五萬四千七百七十四圓五十錢

但壹石ニ付二圓七十五錢ノ積

開拓使^江貸出セシ金ノ利息

金六万千圓

金百七十壹万九千二百三十八圓

合計洋銀四百弗

米壹万九千九百十八石

此代金五万四千七百七十四圓五十錢

歳入總計

金四千八百二十四万八千六百六十圓七十七錢

洋銀五百五十弗

内

金二千六百十五万八千四百五十二圓五十一錢三厘

米八百〇三万〇三百三十石二斗七升七合六分

此金二千三百〇八万三千四百〇八圓二十六錢三厘

但米壹石ニ付金二圓七十五錢ノ積

外

準備金明治六年第一月一日有高

金千六百二十五万八千三百十九圓四錢七厘

內拂

金三十六万圓

造幣室定額

金九十五万四千五百六十九圓

鑄山入費

洋銀十二万七千九百十七弗

日圓

金十六万圓

泗河鑄造局建築及
造幣費九

準備利益

金百二十万圓

內

金二十万圓

鑄山之益

金百万圓

造幣之益

金五十万圓

造幣並鑄山日圓
見也

自明治六年一月一日
至同十二月三十日

金穀出概表

歲出

官省使歲費

太政官

九段
金貳拾七萬八千四百九拾壹圓

三拾三萬圓

五萬五千九百九十四圓

田

宣額未納定

合拾壹萬六千九百五拾八圓

正院

太政官

内

合式万四千円

史官用度局

金九万式千九百五拾五円

月 然

金拾壹万五千七百八拾七円

方 院

合四万九千七百五拾九円

式 部 寮

内

合式千四百円

祭典入費

合四万七千三百五拾九円

月 然

外務省

金拾五万八千七百圓

拾六万八千七百円

大藏省

拾万円 減

金九拾四万五千円

米式百八石

此合音七拾五円

内

合式万四千五百五拾八円

省中諸費

合式万六千円

驛 途 寮

金七万五千円

翻譯局

金七百万円

貨幣改所

金拾九万七千五百六十円

税関及各案出戻
可諸費月給

金三万五千円

浅井倉庫及賣
米納倉所

金三拾九万七千三百七拾八円

在東京
官復月給

金拾七万七千六百六拾七円

同
旅費

金六万八千六百八拾七円

外國人雇給料

金三万五千拾円

回米運等々

陸軍省

金八百万円

海軍省

金百八拾万円

文部省

金百三拾万円

教部省

五万円

六万六千七百円

大文部

九段 金拾壹万六千七百田

内

金四万八千田

定額

金九万六千六百拾田

月給九積

金壹万二千六百拾田

臨時諸費

工部省

金六万九千田

司法省

金四万六千田

六千三百田

七千田增

官内省

金五拾八万五千田

米五万八千石

但 石三付少田七十五畝
此代金四万九千五百田

米四万七千八百拾石七斗

石米三万九千八百斗三升三合

米四万三千八百拾石七斗六升七合

改曆三付壬申冬一月
返概三分引之

官方家禄

但不存前同

此代倉三万石子五拾四石十度九厘

開拓使

金八拾万円

米三万石

此代倉三万石子五拾四石

砂糖六万五拾三万八千八百拾三斤解

同米運賃
下二八

此運賃金七万石子五拾七円解

合計

金七万三千八百八拾八円

米三万六千五百九拾石七斗六升七合

此代倉三万石子五拾四石五拾九厘

府縣歳費

東京府

金三拾万四千円

三府三拾万四千円ヲ減ス

米六千四百石

此代倉六千六百石

大坂府

金貳拾三萬五千四百五拾石

米六千六百四拾石

此代倉七千六百石

京都府

金三拾萬石七拾六石

米八千六百石

此代倉四万九千七百石

縣

金五百八拾八千九百九拾石

米九千七百七拾石

此代倉五萬四千七百七拾石

内

倉百五拾萬八千六百九拾石

倉三拾三萬三千七百七拾石

倉三拾三萬九千五百石

官貨目録

中一筆備

中二筆備

合拾三万六千四百四

米拾四万七千六百

米六千四百石

東京回借費官負被受請取持方
然料多成修繕急難手管菓子
急支倉并水火災救物
借

先刑牢舎

各縣常費増及官員出張費見込

金百万円

三府邏卒入費

五万円ヲ減ス

金六拾二万九千三百拾三円

内

合五拾五万七千四

東京

合四万八千四

京都

合三万六千三百拾三円

大坂

各縣捕亡及邏卒入費

金五拾七万六千八百七円

内

合三万五千六百七拾三円

神奈川
新浮港邏卒入費

各港入費

金拾六万五千四

内

合八万四千

横濱

合四万六千八百

兵庫

合三万三千

長崎

合七万三千

新潟

合計

金五百三十三万五千六百三十三

米五拾万四千四百石

代金五拾二万三千八百石

諸歳費

貫属家禄及赏典

米四百七拾八万六千八百四拾石三斗三升三合

此合金百七拾二万三千八百石六斗三升三合三厘三毫

内

米八拾八万七千九百九拾石六斗三升三合

幕族

米三万四千七百三十三石五斗八升七合

士族

米五拾万三千七百三拾石三斗三升三合

官方及幕士族
赏典

米四万五千八百三拾石三斗三升三合

十津川士族
典

内閣公債年賦

金五拾万八千七百円

旧藩公債

明治五年分

同上利息

金下拾万四五百円

旧藩公債

同上

同上利息償還

金五拾五万円

旧藩公債明治五年分

英國公債年賦

金四拾五万円

同上利息

金三拾七万円

警備堤防

金四百万円

上水普請

此分皆減

金壹万五千円

勅祭

十分塔城

金拾万円

外國交際

洋銀九万六千四百円

親王并随行人員留学費

金壹万円

米佛公使館

洋銀八万九千五百円

新約克
分台港

領事館

洋銀六万七千五百円

合斗金七百八拾万五千円

洋銀六拾万円

米四百五拾八万五千四百拾六元三計三拾七元

中合子六百拾壹万三千八百拾六元三千五百拾七元三毛

臨時歲出

大藏省

金百廿九万九千六百四

也

金五万四

富国製糸坊

口分減

金五万四

由房楮幣口分及
運送入費

金五万九千九百四

郵便及正

金五万四

紙幣寮運集

令七万七千円

及量衡改正

令五万五千円

租税及度債改正并
家禄調定并増収見
以

令三万七千三百円

持幣改造

令七万七千円

国債証券改定
入費

令三万五千円

開港場町上河改
正建築并外

祝壽

令三万五千円

計分減

臨時入費

金百万円

五千万円換

特命全權大使洋行費

金拾七万五千三百円

溥儀博覽會

金六拾四万五千三百円

四

令九万五千三百円

物品聚集及運送若
他費用

令五万五千円

諸費用

東京氏屋建修費

金百廿九万七千五百円

山手塔城

合計

金五百六万九千六百三拾円

歳出總計

金三十四万七千七百七拾五円

洋銀三拾万拜

米四百廿拾万七千五百七拾三石七斗八合

小代金三万三拾七千五百八十二円九拾六錢四厘七毛

歳出總計

金四百七万七千九百六拾六円九拾六錢四厘七毛

洋銀三拾万拜

歳入總計

金四子八百廿四万子八百廿四内七款七款六厘
洋銀五百五拾肆

美引

令五拾壹万子四百六拾三同八拾壹錢壹厘完
洋銀拾九万九千四百五拾肆
歲出万五

國債

明治六年一月一日

内國債

九金五子六百四拾七万四子三百五拾壹同

旧海防及債為

四

九金五子三百七拾壹万子八百廿拾三同

新公債

九金五子四百七拾壹万子四百七拾八同

旧公債

四

令五拾万八千七百同

明治五年 本年歲度部

令五拾万同

新同公債五拾五同未備
今一时債

六令七拾万八千七百四

美門 九令九千五百七拾万九千七百七拾四

明治七年三月迄年終
債金二分

外國債

九金五百七拾万九千七百七拾四

内

百五拾万弗

九令九千五百七拾万四

下ノ年債金

但七令九千四百三拾万

下万磅

九令九千九百磅

禮券買上ノ分引之

八拾九万九千九百磅

九令九千九百九千九百磅

鐵道及橋心ノ債

但七令九千九百九千九百磅

内外國債合計

九金三千九百九拾八万三千四百七拾四

精幣

明治六年一月一日

九金八千四百九十九兩八錢六厘 流通金

四

金四万三千七百八十二兩七錢一分 大政出札

金七千四百七十六兩七錢一分一厘 民部出札

金二千四百五十八兩七錢八厘 新札

新貨金

九金五千四百九十九兩八錢六厘 旧貨金

合計

金一億三千四百九十九兩八錢六厘

明治六年歳入出見込會計表

歳入之部

第一 田租 總計金四万五千四百八十四兩八錢六厘

内 米

田租 金四万五千四百八十四兩八錢六厘

内

田租及高
大場場租

米一万五千四百八十四兩八錢六厘
代金五千四百八十四兩八錢六厘

同

金五千四百八十四兩八錢六厘

内金五拾兩

畑水及草及山田見込

三有地稅高賣
免許稅其外
金三拾之方之方以拾之同之拾以乘之重

內

東京府下稅
金十七万七千七百五拾四圓
洋銀万五千兩
地稅見込

大阪府下稅
金拾万九千五百五拾四圓
內金四万圓
地稅見込

京都府下稅
金山万二千六百七拾六圓
內金五千圓
地稅見込

各種ノ鑑札稅
金三拾之万五千圓

內

牛馬鑑札稅
金五万圓

生糸鑑札稅
金山拾万五千圓

多額採鑑札稅
金六万圓

船稅
金三万四千圓

娼僕車馬ノ稅
金二万三千四百五拾六圓

第二印紙稅
總計金百三拾万圓

內

印紙稅
金万五圓

蚕種紙稅
金山拾万圓

生糸印紙稅
金拾万圓

第三酒類其外各種稅
總計金山百拾二万七千六百五拾四圓

內

酒類稅
金七拾万四千圓

紋油稅 金五万五千円

砂糖稅 金四万七千七百七十円

各種稅 金五万九千三百三十四円

均

諸拂物 延喜口米
代金口永類 金九万五千四百四十円

國稅金 金拾五万九千六百九拾四円

第四 海關稅并諸稅總計 金五万七千七百九十円

内法

東京 金四万五千八百四十四円

横濱 金万七千七百四十四円

兵庫 金三拾万五千四百三拾八円

大阪 金八万九千七百三拾四円

長崎 金拾五万二千七百三拾三円

新潟 金四万四千九十四円

第五 郵便稅瀛車、電信、收入總計 金四拾万円

内法

郵便稅 金四拾万円

瀛車、電信、收入 金四拾万円

第六 山海道收納高 總計 金三拾万五千七百三拾四円

内法

產物之稅 金三拾一萬圓

海關稅 金山萬五千圓

酒稅 金三萬八千五百圓

第七 臨時稅之入高 總計金百七拾一萬七千五百圓

內稅

貸出金及利息 金百七拾一萬七千五百圓

內

年割之納 金拾五萬圓

年賦貸附 金三拾五萬八千五百圓

開拓使(貸出金利息) 金二萬五千圓

貸出金敷出納 金三拾五萬八千五百圓 內其稅金

關及物其外抽下 金三拾一萬七千五百圓

賦與金 金山拾一萬圓

合計

通常收入 金四十一萬八千五百圓

同

臨時收入 金百七拾一萬七千五百圓

第八總計金四萬五千七百七十九兩九錢四分

歲出之部

第一 國債消却 總計金壹萬七千七百兩

內珠

利息是三千五百兩
債票是二千四百兩

金五拾萬七千七百兩

明治五年分

利息是三千五百兩
債票是二千四百兩

金五拾萬七千七百兩

全上

一時債票是二千四百兩

金五拾萬七千七百兩

外國債

元金五拾萬七千七百兩
利息金三拾七千兩

第二 貴屬家祿費典末

總計金壹萬二千七百兩

三年分

第三 賞給修坊

總計金壹萬兩

第四 外國交際 總計金控方之萬圓

第五 大臣官 總計金三控之萬圓

第六 省署性府縣 總計金四萬二千五百圓

內訳

外務省 金控方之千七百圓

大藏省 金以控方之千四百圓

陸軍省 金以方萬圓

海軍省 金以控方萬圓

文部省 金以控方萬圓

農林省 金以方萬圓

工部省 金以方九控萬圓

司法省 金以控之方圓

文部省 金以控之方千五百圓

開拓使 金以控七方七千二百圓

之 府 金以控方之方圓

此 縣 金以方九控九方千五百圓

第七 府知事之及署 總計金以控之方圓

內訳

之府置 總計 金以控七方九千三百圓

各知事之及 金以控七方九千七百圓

置 總計

第八

仲莫公供彼 總計金四万九千五百四

第九

外与卷 總計金四万五千四百

第十

臨時軍出 總計金四万五千三百

內誤

大籍者郵便所而向應花幣引糧隊送及同債理書制送云

金五万七千四百五十

將軍全權在後各解以

金五万七千五百

軍用持夜金

金四万五千五百

一級臨時軍務局

金四万五千五百

總計

通商軍出 金四万五千五百

日

臨時軍出 金四万五千五百

軍出總計金四万五千五百

軍入總計金四万五千五百

軍出總計金四万五千五百

歲入ノ歲出ヨリ多キ高

金山右控向方ノ方ニ候也因ノ控一表ノ重

大正

文

井上馨奏議係新聞紙類

西冊子抄本批
知之物也
乃多

大政官

可也之類
同云云
再云云

六月十七日

政府前ノ會計細
外ノ人氣ヲ害
納ノ預算ヲ發行
命ニ因リ大隈
氏ノ論ヲ説破
今ヤ世人此觀
ヘキ時至レリ
抵井上氏ノ論
固ノ臭態ヲ世ニ

六月十七日
政府前ノ會計細
外ノ人氣ヲ害
納ノ預算ヲ發行
命ニ因リ大隈
氏ノ論ヲ説破
今ヤ世人此觀
ヘキ時至レリ
抵井上氏ノ論
固ノ臭態ヲ世ニ

可也之知
同云々
再ん
注

六月十七日

ヘラルド

政府前ノ會計總裁井上氏ノ建言ニ因テ大ニ内
外ノ人氣ヲ害セルニ驚キ千八百七十三年ノ出
納ノ預算ヲ發行セル其數額ハ首輔三條實美ノ
命ニ因リ大隈氏ノ算定セル所ニシテ其首ニ井上
氏ノ論ヲ説破スル為ノ論文アリ
今ヤ世人此齟齬矛盾セルニ文ノ曲直ヲ裁判ス
ヘキ時至シリ余カ曹ノ知ル所ヲ以テ土人ハ大
抵井上氏ノ論ノ確着精詳ナルヲ信ス然レモ又
固ノ臭態ヲ世ニ露ハスヲ譏リ凡ノ廟堂上ノ

大隈

此新
中
係
大隈

うルド
 氏ノ建言ニ因テ大ニ内
 キ千八百七十三年ノ出
 敷額ハ首輔三條實美ノ
 入セル所ニシテ其首ニ井上
 論文アリ
 ルニ文ノ曲直ヲ裁判ス
 知ル所ヲ以テ土人ハ大
 相詳ナルヲ信ス然レモ又
 一ヲ譏リ凡ノ廟堂上ノ

長教

此新聞紙ノ論難ヲ辨解スヘキ
 中家ヲ起スノ命アリシニ皆算計也
 係ル條件ハ先ノ五ノ下ク紙ノ通リ
 大藏省ニ取調ニ上再々此
 事ハ下ノ如ク紙ノ通リ
 事多ク色ニシテ
 似合後ニヤハシムル辨解
 下リシニ尚善堂ノ件部
 左ニ出ル新聞紙ノ稿ノ在
 新聞ノ如クある事
 事多ク

瑕玼ノ世ニ顯ハレ殊ニ他邦ノ人ニ洩ラスハ國
ヲ憂フル者ノ所為ニ非スト云ヘク此論ハ隱秘
虚飾ヲ以テ益ヲ得ヘキ時ハ必ウ又實ヲ枉ケ非
ヲ掩フ所ノ東方人ノ通患ニ能ク合ヘリ又外國
人ハ大抵今回ノ計算ヲ信セス歳入ノ有餘ハ僅
カニ筆頭ノ模稜ニ依テ
隈氏之ヲ二百萬ト為シテ實ヲ飾リタルハ同
氏ノ計算ヲ疑フ人ノ洞察ヲ逃ル、
能ハス蓋
シ政府ヨリ屢出ス所ノ計算皆大差アリテ一定
セサルヲ以テ察スルニ百事紛更ノ際ニ當テ出

納紊乱ニ統緒稍定マリ貢税ノ法一決スルマテ
ハ國債入額出額皆知ル可ラサルナラニ然シハ
縱令事實ヲ粉飾スルノ意ナキモ詳密ニ近キ計
算ト雖モ尙為ス_レ能ハサルナリ然ルニ書中往
々總計ノ下ニ於テ圓以下ノ小数三位ニ下ル者
アリ數百萬圓ノ差異モ尙保ス可ラサル計算ニ
於テ是ノ如キ毫ミ
ソ一笑ニ供スヘ
乱雜セル數中ニ於テ其真ヲ得ント欲スレハ其
詳細ヲ知ラサル可ラス然ルニ今其詳細ヲ載セ

瑕玼ノ世ニ顯ハレ殊ニ他邦ノ人ニ洩ラヌハ國
ヲ憂フル者ノ所為ニ非スト云ヘク此論ハ隱秘
虚飾ヲ以テ益ヲ得ヘキ時ハ必ウ又實ヲ枉ケ非
ヲ掩フ所ノ東方人ノ通患ニ能ク合ヘリ又外國
人ハ大抵今回ノ計算ヲ信セス歳入ノ有餘ハ僅
カニ筆頭ノ模稜ニ依テ二千萬トモ為スヘキヲ大
隈氏之ヲ二百萬ト為シテ實ヲ飾リタルハ同
氏ノ計算ヲ疑フ人ノ洞察ヲ逃ル、丁能ハス蓋
ニ政府ヨリ屢々出ス所ノ計算皆大差アリテ一定
セサルヲ以テ察スルニ百事紛更ノ際ニ當テ出

二千萬

納紊乱ニ統緒稍定マリ貢税ノ法一決スルマテ
ハ國債入額出額皆知ル可ラサルナラニ然レハ
縱令事實ヲ粉飾スルノ意ナキモ詳密ニ近キ計
算ト雖モ尚為ス_丁能ハサルナリ然ルニ書中往
々總計ノ下ニ於テ圓以下ノ小数三位ニ下ル者
アリ數百萬圓ノ差異モ尚保ス可ラサル計算ニ
於テ是ノ如キ毫末ノ詳ヲ記シツルハ實ニ捧腹
ソ一笑ニ供スヘキノミ
乱雜セル數中ニ於テ其真ヲ得ント欲スレハ其
詳細ヲ知ラサル可ラス然ルニ今其詳細ヲ載セ

以上ノ文句

殊ニ他邦ノ人ニ洩ラスハ國
爲ニ非ストスヘク此論ハ隱秘
得ヘキ時ハ必ラス實ヲ枉ケ非
人ノ通患ニ能ク合ヘリ又外國
計算ヲ信セス歳入ノ有餘ハ僅
依テ二千萬トモ爲スヘキヲ大
ト爲シテ實ヲ飾リタルハ同
人ノ洞察ヲ逃ル、^一能ハス蓋
ス所ノ計算皆大差アリテ一定
スルニ百事紛更ノ際ニ當テ出

二千萬二十萬ノ誤カセシ故新書ニシテ

定マリ貢税ノ法一決スルマテ
皆知ル可ラサルナラニ然レハ
スルノ意ナキモ詳密ニ近キ計
一能ハサルナリ然ルニ書中往
テ圖以下ノ小数三位ニ下ル者
差異モ尚保ス可ラサル計算ニ
未ノ詳ヲ記シツルハ實ニ捧腹
キノミ
於テ其真ヲ得ント欲スレハ其
可ラス然ルニ今其詳細ヲ載セ

以上ノ文面係ル答詔ハ別段算計ノ煩ハス不及

サレハ其數額ヲ疑フ人ハ暗暝ノ中ニ途ヲ探ル
カ如シ出額入額氏ニ之ヲ非トスルヲ得ス又
之ヲ是トスルヲ得
キ道十キヲ以テ已ム
大隈氏カ起セル五里
十リ

一歳ノ入税ハ大抵米ヲ以テ納ムル者十レハ政
府計算ノ大本トメ平均ノ米價ヲ載スルハ井上
氏ノ定ムル所ハ依
ト去年ノ收納ハ洋

心ヲ載セサルヤ

又今年ノ入税ヲ處分スルニ至テ去年ト同
不當ノ策ヲ用ヒント欲
其策ハ獨リ出港ノ
商ノ益トハナレ氏明ウカニ政府ノ益ニ非ス又
此奸商ヲ除クノ外ハ一人ノ益ニ非サル拙策十
リ
内外國債ノ一事ニ於テモ大隈ノ説稍含糊セリ
同氏遠カラス分明ノ解説ヲ為サレト云フ且シ
ク速カニ公布シテ世ノ疑ヲ解クヘシ其説ニ云

サレハ其數額ヲ疑フ人ハ暗暝ノ中ニ途ヲ探ル
カ如シ出額入額氏ニ之ヲ非トスルヲ得ス又
之ヲ是トスルヲ得ス算術ヲ用ヒテ推窮スヘ
キ道ナキヲ以テ己ムヲ得ス己レノ臆断ニ據リ
大隈氏カ起セル五里ノ霧ヲ拂ハサルヲ得サル
ナリ

一歳ノ入税ハ大抵米ヲ以テ納ムル者ナレハ政
府計算ノ大本トシ平均ノ米價ヲ載スルニ井上
氏ノ定ムル所ハ低キニ過キタルヲ云ヘ凡何故
ニ去年ノ收納ハ運漕諸雜費ヲ除テ毎斛幾圓十

心ヲ載セサルヤ

又今年ノ入税ヲ處分スルニ至テ去年ト同シク
不當ノ策ヲ用ヒント欲スルヤ否ヲ載セサルヤ
其策ハ獨リ出港ノ利ヲ網セント欲スル一二奸
商ノ益トハナレ凡明ウカニ政府ノ益ニ非ス又
此奸商ヲ除クノ外ハ一人ノ益ニ非サル拙策ナ
リ
内外國債ノ一事ニ於テモ大隈ノ說稍含糊セリ
同氏遠カラズ分明ノ解説ヲ為サント云フ且シ
ク速カニ公布シテ世ノ疑ヲ解クヘシ其說ニ云

太政官

此一條文音
計算上

平均ノ米價
以下モ
爲

五里ノ霧
不
早
ラルトノ
障

疑フ人ハ暗瞑ノ中ニ途ヲ探ル
以氏ニ之ヲ非トスルヲ得ス又
ヲ得ス算術ヲ用ヒテ推窮スヘ
己ムヲ得ス己レノ臆断ニ據リ
五里ノ霧ヲ拂ハサルヲ得サル
抵米ヲ以テ納ムル者ナレハ政
ノ平均ノ米價ヲ載スハニ井上
低キニ過キタルヲ云ヘ凡何故
運漕諸雜費ヲ除テ毎斛幾圓十

處分スルニ至テ去年ト同シク
ント欲スルヤ否ヲ載セサルヤ
凡ノ利ヲ網セント欲スル一二奸
凡明ウカニ政府ノ益ニ非ス又
外ハ一人ノ益ニ非サル拙策十
平ニ於テモ大隈ノ説稍含糊セリ
分明ノ解説ヲ為サント云フ且シ
シテ世ノ疑ヲ解クヘシ其説ニ云

太政官

五里ノ霧ノ典故ヲヘラルトノ容易ニ用ヒシ
ト不審此中籍兼テ井上ヨリ返リタルノ尻尾ニ
ニ寸ハ孰シ漢文ヲ生シテ成リタルノ頭ニ
ニテ希ノ筆意大ニ名氣ヲ帯ヒタルアリ是
ラルトノ半ヲ倍リテ井上名氣ヲ濃シテ亦明
帯ノ名氣ハ外人何ソ井上名氣ノ地ヲめシテ政
府ノ事ニ及フベシ

平均ノ米價ヲ載セサル所以ヲ辨シテ後ニ表出ス
ルト名トシテ皆大藏省算計上ニ角シ運漕諸費
以下トシテ石兩件ノ付紙ヲ得テ始メテ答詰
稿ヲ起スベシ

此條又意解シ難シ同シノ説誤課ニ正シテ後
計算上ノ事ニ及フベシ

外債ハ諸族ノ祿

フノ一處法アリト此論

全國分裂シ政府覆滅スルノ恐ヲモ顧

政能ク此險策ヲ施シ得ルヤ

同氏庶民ニ借與セル金穀アリト云フ然レモ政

府内國ノ財主ヲ

利加ニ於テ三浦

知ル所ニ非スヤ

楮幣發行ノ論モ亦大隈氏ノ言フ所甚ク浮泛十

リ其發行ノ總額ハ今確知ス可ラズト雖氏或ハ

五万圓

此數恐クハ誤アリ

ナリト云ヒ或ハ

云フ然ルニ大隈

ト云フハ餘リニ世人ヲ愚ニセル論ナリ察スル

ニ貯金多キモ恐

然ルニ之ヲ以テ

ヲ償ハントスレ

ノ計ヲ以テ之ニ

スルヲ能ハス然

約スレハ余輩翹首シテ日々ニ之ヲ待ツノミ

大隈氏現今發行セル楮幣ノ總數ヲ避テ記サズ

[Faded handwritten text and red ink annotations on a piece of paper pasted over the main text.]

外債ハ諸族ノ祿制ヲ定メ有餘ヲ以テ不足ヲ償
フノ一處法アリト此論ハ簡便ノ法ニ似タレモ
全國分裂シ政府覆滅スルノ恐ヲモ顧ミヌメ執
政能ク此險策ヲ施シ得ルヤ
同氏庶民ニ借與セル金穀アリト云フ然レモ政
府内國ノ財主ヲ饜カシムヘキ計ヲ得ヌメ至墨
利加ニ於テ三通ノ證書ヲ發行セルハ世ノ能ク
知ル所ニ非スヤ
楮幣發行ノ論モ亦大隈氏ノ言フ所甚ク浮泛ナ
リ其發行ノ總額ハ今確知ヌ可ラズト雖氏或ハ

此一段計

五万圓此數恐クハナリト云ヒ或ハ之ニ倍スト
云フ然ルニ大隈氏別ニ之ニ充ツヘキ貯蓄アリ
ト云フハ餘リニ世人ヲ愚ニセル論ナリ察スル
ニ貯金多キモ恐ラクハ二千万圓ニ過ク可ラス
然ルニ之ヲ以テ苟クモ一億万圓ニ超ユツル數
ヲ償ハントスレハ大ニ楮幣ノ價ヲ減セスノ何
ノ計ヲ以テ之ニ處スルヲ得ルヤ餘カ輩實ニ解
スルヲ能ハス然レモ大隈氏其解説ヲ為サント
約スレハ余輩翹首シテ日々之ヲ待ツノニ
大隈氏現今發行セル楮幣ノ總數ヲ避テ記サス

五万圓

大隈氏

計算

祿制ヲ定メ有餘ヲ以テ不足ヲ償
リト此論ハ簡便ノ法ニ似タレ氏
府覆滅スルノ恐ヲモ顧ミヌメ執
ヲ施シ得ルヤ

與セル金穀アリト云フ然レ氏政
ヲ廢カシムヘキ計ヲ得スノ至墨
通ノ證書ヲ發行セルハ世ノ能ク

モ亦大隈氏ノ言フ所甚ク浮泛十
額ハ今確知ス可ラズト雖氏或ハ

ナリト云ヒ或ハ之ニ倍スト

氏別ニ之ニ充ツヘキ貯蓄アリ
世人ヲ思ニセル論ナリ察スル

ラクハ二千万圓ニ過ク可ラス
苟クモ一億方圓ニ超エツル數

大ニ楮幣ノ價ヲ減セスノ何
處スルヲ得ルヤ餘カ輩實ニ解

レ比大隈氏其解説ヲ為サント
首シテ日ノ之ヲ待ツノミ

セル楮幣ノ總數ヲ避テ記サス

此一段計算ニ関セシラ答諾アルヘシ

此一段計算ニ関セシラ答諾アルヘシ

五千万圓ハ又之ニ倍スト云傳ニ大隈氏書ニ見ヘス

大隈氏書ニ見ヘス不日精細ニ調査云々ノ語アリ

此一段計算ニ関セシラ答諾アルヘシ

又方今既ニ刷板シ用テ待テ發行セントテ大藏
省中蓄藏セル五千万圓ニ言ヒ及ホサ、ルハ怪
ムヘシ國民ノ手ニ流通セル楮幣ハ他ノ金貨
ト同ク内國ノ負債ナルコト固ヨリ論ヲ待タスメ
政府之ヲ放棄セント欲スルノ意アルニ非シハ
遂ニハ債却スヘキ期アリ然レハ國債ノ計算中
闕ク可ラサル者ニアラスヤ亞國ノ會計總裁録
背幣楮幣ヲ出納ノ表中ヨリ省キタル時世評果
シテ如何ナリシヤ

大隈氏外國負債ノ計算モ正シカラス同氏其

數ヲ五百五十万圓ト記スレモ是ハ初度ノ債
數ニ其利子等ヲ合算セルノ三十万圓大隈氏ノ計
算ハ必ラス本年ヲモ籠メテ算スルナラニ然ル
ニ本年政府又千二百万圓ヲ借リテ其中五百萬圓
ハ既ニ受取り其餘モ既ニ受取り
ノ明ラカニ知ルコトニヤ之ヲ合算スレハ外
債ノ數ハ千八百万圓ナリ
大隈氏ノ數額ヲ余カ確知スル所ニ徴シテ正シ
カラサレハ其餘ノ精慶ハ徴スルノ道ナシト雖
凡亦疑ハサルコトヲ得ス云々以下結文略

又方今既ニ刷板シ用テ待テ發行セントテ大藏
省中蓄藏セル五千万圓ニ言ヒ及ホサルハ怪
ムヘシ國民ノ手ニ流通セル楮幣ハ他ノ金貨
ト同ク内國ノ負債ナルコト固ヨリ論ヲ待タスメ
政府之ヲ放棄セント欲スルノ意アルニ非シハ
遂ニハ債却スヘキ期アリ然レハ國債ノ計算中
闕ク可ラサル者ニアラスヤ亞國ノ會計總裁録
背幣楮幣ヲ出納ノ表中ヨリ省キタル時世評果
シテ如何ナリシヤ

大隈氏外國負債ノ計算モ正シカラス同氏其

數ヲ五百五十万圓ト記スレモ是ハ初度ノ債
數ニ其利子等ヲ合算セルノ三十万圓大隈氏ノ計
算ハ必ラス本年ヲモ籠メテ算スルナラニ然ル
ニ本年政府又千二百万圓ヲ借リテ其中五百萬圓
ハ既ニ受取り其餘モ既ニ授受ノ中ニ在ルハ世
ノ明ラカニ知ル所ニ非ヌヤ之ヲ合算スレハ外
債ノ數ハ千八百万圓ナリ
大隈氏ノ數額ヲ余カ確知スル所ニ徴シテ正シ
カラサレハ其餘ノ精慶ハ徴スルノ道ナシト雖
凡亦疑ハサルコトヲ得ス云々以下結文略

此一段モ

大隈氏

刷板ニ用テ待テ發行セントテ大藏
セル五千一圓ニ言ヒ及ホサルハ怪
民ノ手ニ流通セル楮幣ハ他ノ金貨
國ノ負債ナルヲ固ヨリ論ヲ待タスメ
放棄セント欲スルノ意アルニ非シハ
却スヘキ期アリ然レハ國債ノ計算中
ナル者ニアラスヤ亞國ノ會計總裁録
ヲ出納ノ表中ヨリ省キタル時世評果
ナリシヤ

外國負債ノ計算モ正シカラス同氏其
五十萬圓ト記スレモ是ハ初度ノ債
子等ヲ合算セルノミナリ大隈氏ノ計
ス本年ヲモ籠メテ算スルナラニ然ル
所又千二百萬圓ヲ借リテ其中五百萬圓
取り其餘モ既ニ授受ノ中ニ在ルハ世
ニ知ル所ニ非ヌヤ之ヲ合算スレハ外
千八百萬圓ナリ
數額ヲ余カ確知スル所ニ徴シテ正シ
ハ其餘ノ精慶ハ徴スルノ道ナシト雖
サルトヲ得ス云々以下結文略

大隈

此一段モ計算ノ御下紙ヲ仰キナリ

別紙新字
高賢之如
翻字局
長
三
三
三



内
外
本
誤

六
文

大正

六月廿一日

ウイキレノ

政府ヨリ出セル出納ノ計算ハ必ラス毀言ヲ免
 カレサラント察セシカ果メジャツパンヘラルド
 中刺レク之ヲ論破セリ然レモ其事ノ重大ナル
 慢然読過スヘキ者ニ非レハ今其論ノ瑕玼アリ
 テ我カ曾テ論スル所ノ正確ナルニ如カサル所
 以テ述フヘシ

現今ノ會計總裁大隈重信カ政府ノ為ニ務メテ
 出納ノ体ヲ飾ラント欲スル意アルハ實ニ然ル
 ハキトナレモ又井上馨ハ勉メテ之ヲ譏ラント

欲スルコト分明ナリ近來東京ニ於テ党私ノ情熾
ナリシハ掩フ可カラサル所ニ其互ニ相排撃
セル間井上氏敗北シテ身ヲ退コント決シ其未
ダ迄ヲ去ラサルニ及テ敵人ニ一大傷ヲ蒙ラシ
メント謀レリ譬ヘハ井上馨ハバルレテ人ノ北
クルニ臨テ横サマニ箭ヲ放ツカ如シ而其命
中誤ラス且ツ箭幹全ルニ毒ヲ以テシタレハ其
傷瘡果シテ大ナリ然レハ大隈ノ計算ヲ譏レル
又ハ其論浮疎ニ殊ニ其事ノ重大ナルト對稱
セス先ツ大隈氏歳入ノ有餘ヲ二万萬ト笑スル

ヲ嘲ケリ僅カニ筆頭ノ摸稜ヲ以テ之ヲ二千万
ニ作ルモ亦容易ナリト云ヘル一糸若シ其計莫
ク以テ根柢スル所ナキ妄算ナリトモハ其數ノ
変スルト固ヨリ意ノ隨ナリ然レハ勉メ真數
ヲ表セント欲スル者ナラハ豈妄リニ之ヲ變易
スルトヲ得ンヤ又毎項至微ノ數ヲモ記レテ虛
偽ノ飾レリト曰ヘル若シ前年ノ成算ニ拠テ一
年ノ歳費ヲ推定セハ其詳細ノ數ニ下ルモ疑ノ
ニ足ラス是ノ如キ些々ナル詐術ヲ以テ現今ノ
會計總裁ヲ罪スルハ不通ノ論ニ且人ヲ知ラ

ト謂フヘシ又委曲詳説スヘキ所ニ於テ泛然
概教ノミヲ掲クテヲ識レモ然テ會計ノ總裁
ル者年々増減スヘキ入額ニ於テハ別ニ之ヲ詳
説スヘキ故テルニ非レハ皆其精算ヲ掲ケス米
價ニ訖テハ余之ヲノ
圓九十六錢ノ算定
餘米ノ平均相場ニ
レテ高キニ過キタ

田二對一其計ノ算定ノ詳
場價ノ日誌ノ算定ノ詳

曰法ハ總テ貿易ノ大法ニ背キ然未ニ過リテ尚
クモ政府タル者ノ為スヘキ所ニ非ズ制スル

所ヲキ貿易ノ真利ヲ知ラサル人ハ機宜ヲ窺
常套ヲ脱スルモ亦一時ノ權道ナルヲ説テ之ヲ
欺クキ得可シ然レモ真ニ改理ヲ知ル人ハ世ノ
經驗ニ從テ大法ヲ循守シ且ク之ヲ信ノ疑ハス
去歲米穀ノ輸出ニ於テ亦能ク此道ニ從ハ其
日本ニ益アルト迪カニ大ナリシナラシ其失計
ノ害ハ余々曹ノ先見ニ違ハスノ農民ノ為ニハ
毫モ益スル所ナクノ大蔵省ノ得ル所モ亦甚ク
少ナシ若シ真ノ良相ナラハ上下共ニ其益ヲ蒙
ラシメン

ト謂フヘシ又委曲詳説スヘキ所ニ於テ泛然
概數ノミヲ掲クモテ識レモ然テ會計ノ總裁
ル者年々増減スヘキ入額ニ於テハ列ニ之ヲ詳
説スヘキ故アルニ非レハ皆其精算ヲ掲ケス米
價ニ訖テハ余之ヲ人ニ問テ其実ヲ得タルニ二
圓九十六錢ノ算定ナリト云フ海外ニ輸出スル
餘米ノ平均相場ニ比スレハ稍實ヲ超レ又決
レテ高キニ過キタリト曰フ可カラズ但輸出方
日法ニ總テ貿易ノ大法ニ背キ然未ニ過リテ苟
クモ政府タル者ノ為スヘキ所ニ非ズ

制スル

大隈氏ノ録
七十五錢ヲ
傳ニ屬ス

所ナキ貿易ノ真利ヲ知ラサル人ノ機宜ヲ窺
常套ヲ脱スルモ亦一時ノ權道ナルヲ説テ之ヲ
欺ルキ得可シ然レモ真ニ改理ヲ知ル人ハ世ノ
經驗ニ從テ大法ヲ循守シ且ク之ヲ信ク疑ハス
去歲米穀ノ輸出ニ於テ亦能ク此道ニ從ハ其
日本ニ益アルト迫クニ大ナリシナラシ其失計
ノ害ハ余々曹ノ先見ニ違ハスノ農民ノ為ニハ
毫モ益スル所ナク大蔵省ノ得ル所モ亦甚ク
少ナレ若レ真ノ良相ナラハ上下共ニ其益ヲ蒙
ラレトシ

委曲詳說スヘキ所ニ於テ泛然
レテ譏レモ然テ會計ノ總裁
ヘキ入額ニ於テハ列ニ之ヲ詳
ニ非レハ皆其精算ヲ掲ケス米
之ヲ人ニ問テ其實ヲ得タルニ二
定ナリト云フ海外ニ輸出スル
ニ比スレハ稍實ヲ超レ也又決
タリト曰フ可カラズ但輸出方
ノ大法ニ背キ然未ニ遍リテ尚
者ノ為スヘキ所ニ非ズ

錯制スル

其利ヲ知ラサル人ノ機宜ヲ窺ニ
亦一時ノ權道ナルヲ説テ之ヲ
然レモ真ニ改理ヲ知ル人ハ世ノ
法ヲ循守シ且ツ之ヲ信ク疑ハス
出ニ於テ亦能ク此道ニ從ハ其
迥クニ大ナリシナラン其失計
先見ニ違ハスノ農民ノ為ニハ
ノ大蔵省ノ得ル所モ亦甚ク
良相ナラハ上下共ニ其益ヲ蒙

大隈氏ノ録呈スル歲計表ノ計算ニ斛ニ四
七十五錢ヲ以テ算定スル所ニ生テ此條修
傳ニ爲ス



華士族ノ禄ヲ減シテ外債ノ償却ニ充テト云
ハルハ其理ナシ此俸禄ノ為ニハ歳出中既ニ
千二百萬金ノ備アリ而令回借用ノ金ハ成ル
ハキ文此利子ノ本債ヲ償却スルニ用ノヘシ按
ルニ此又華士族ノ曰禄ヲ以テ政府ノ負債トナ
シ現今十分一ノ禄制ハ其利子ノ論ヲ立ル
ナリ然レモ父借用ノ金額僅カニ千三百方ヲ以
テ其利子ノミセ千二百萬ニ及ヘル大責ヲ償却
セシト欲スルモ大ニ為スアルヲ能ハサルハ必
然ニノ且政府ノ處置若シ宜キヲ失ヒハ遂ニ其
益ヲ得ルヲ能ハサルヘシ然レモ日本ノ如キ百

分ノ十二ヲ以テ尋常ノ利子トスル國ニ於テハ
其子錢ノ數大ナリト虽且一概ニ英國ノ例ヲ以
テ其母錢ヲ推測ス可ラス外國ニ於テハ是ノ如
キ俸禄ヲ買ノニ七年或ハ十年ノ入額ヲ以テセ
ハ足レリ日本ニ於テモ亦恐ラクハ刻薄ト謂フ
可ラス又政府ヨリ庶民ニ貸出セル金穀アルハ
世人ノ普子ク知ル所ナレハ「ハラルド」ノ之ヲ識
ルハ非ナリ
楮幣發行ノ一条ニ就テ「ハラルド」大蔵省中貯
蓄ノ二千万圓ヲ用フル法ヲ知ラズ其論大ニ誤

テリ僅カニ二千萬田ノ金ヲ以テ一億萬田ノ楮
幣ヲ償還ス可ラサルハ固ヨリナリ然レモ今權
リニ一億方ノ楮幣アリトモ説テ立テニ若シ
大藏省中ニ於テ之ヲ交換スルノ布達ヲ出サハ
楮幣ノ還リ来ルハ僅カニ數百萬ニ其後ハ人
民其便ニ隨テ金ヲ得可キノ知リ復々後々交換
ヲ請フ者ナカレハ固ヨリ此法ヲ以テ全國ノ
貨幣ヲ悉ク償還スルヲ能ハスモ楮幣ノ便
ナルハ却テ迥カニ金貨ニ勝リ而シテ政府余カ
言ヲ用ヒテ此法ヲ行ハ、其益必テ余カ先見

スル所ニ違ハサラン
近頃大藏省中ニ於テ刷印セル楮幣ハ之ヲ發行
シテ現額ノ數ヲ増スニハ非ニ唯曰諸藩ノ楮幣
ヲ引上ケ新幣ヲ以テ之ニ代フルノ意ハ四下
楮幣ヲ儲フル者ニ在テハ新々ニ政府ヲ以テ債
主ト為シ且其楮幣一地ニ限ラズノ普子ク全國
ニ流通スルノ益アリ
大隈氏外債ヲ以テ五百五十萬ト為セルハ唯初
度ノ借金ノミヲ舉ル者ニテ第二回ノ募金ヲ合
算スレハ尚千二百五十萬ヲ加ヘシ合之ヲ計

算中ニ掲ギヤルハ其金倫敦ヨリ來リテ未ダ手
ヲ觸レタルカ為ナリ然ルニ世人ノ熟知セル大
債ヲ隠レテ書セスト云ハ誣ヒタリト云フハ
且内外ノ國債ハ遠カラズノ調査シ公布スヘ
シト云フ然レハ其公布ノ出ルヲ待テ果ノ正シ
カラサレハ其時ニ至テゴソ之ヲ識ルヘキナリ
下畧

六月廿一日發行セルウィーキーリメーブル新聞
紙ニゴヤパンヘウルド中ニ先般政府ヨリ出セ
ル出納ノ計算ヲ論破セシヲ更ニ論辨セリ其說
ク所繫子公平ニ出テヘラルドガ赤上氏ノ瓜分
トナリ政府ヲ仇視スルモノト大ニ逕庭アリ但
其條件中ニ云フ米價ニ就テハ余之ヲ人ニ問テ
其實ヲ得タルニ二圓九十六錢ノ算定ナリトア
ルハ頗ル誤聞ト謂フ可シ大隈氏ノ録呈スル歳
計表ノ計算ハ一斛二圓七十五錢ヲ以テ算定ス
ル所ノモノ確實ニシテ更ニ疑フ可キナシ仍テ

彼此比較スル時ハ一斛ニ付二十一錢ノ差違ヲ
生セリ是則問ヒニ答ヘタル者ノ疎漏ニシテ^{セル}ウ
イ^イキレ^レメ^メル^ルノ罪ニ非スト雖^レ一斛ニ付
二十錢ノ違ヒアル時ハ之ヲ全額ニ乘シ其違算
ノ大ナルモ亦推知ル可シ且ツ一斛ノ價ニ圓七
十五錢トセハ同書ニ掲クル海外輸出ノ餘米相
場ニ於テモ亦甚クノ頷頷十カル可シ予ヤ算計
ノ事ニ疎ク敢テ大方家ノ論ニ喩テ容ル、ノ意
ナシト雖^レ右代價ノ件ニ於テハ未^レタ^レ為^レメ^レ之
ヲ辨スル者アルヲ聞カス仍テ一書ヲ貴社ニ投

シ以テ看官ノ惑ヒヲ解カシ^テヲ希フ斯ク言フ
者ハ京橋近旁ニ寓スル一書生ナリ

右六月五日何解口西セル^ルイ^イル^ル
非^レ顔刺^レ屈^レ新^レ興^レ社^レハ^レ州^レ橋^レあり^レる^レ

第二号

我輩古罰文ヲ讀ミ且ツ愕キ且ツ疑フ此更果シ
テ然ルニ於テハ政府ノ非常ノ處置ヲ如何評論
ス可トフ知ラス夫レ自政事務ヲ上表シ新聞ニ
載レシトテ四十日奴役且ツ四十日私宅ニ於テ
禁錮ノ裁断有リ且ツ云之ヲ世ニ公布スルハ國
律ヲ犯スニ至レリト抑々井上氏ノ會計事務ノ
弊害ヲ論スル文ノ詭譎ナルヲ論ハス之ヲ新聞
紙ニ載セシヲ以テ重罪ヲ犯セシト為シ尋常完
徒ノ刑ニ處セントス然ルニ苟モ其國典ヲ犯ス
ノ重罪ナルニ政府ニ於テ終カニ三回金ヲ以テ

其罪ヲ贖フトハ將タ條理ノ立メスト謂フ可
欺將々捧腹ニ耐ハザルト謂フ可キ歟恐クハ政
府ニ於テ如是裁断曾テ之レ有ルニ非ス日本ノ
新聞家一時虚假ノ飛言ヲ掲ケルナラン歟余ヲ
以テ之ヲ視レハ素リ信スルニ足ラサル至愚大
衰ノ拳ニルカ如シ嗚呼大臣ニシテ大典ヲ犯シ
終カニ三四ノ罰金ヲ以テ其悉概ノ罪科ヲ免カ
レ四十日ノ奴役四十日ノ禁錮ヲ贖フニ至レリ
トハ真ニ笑西ニ餘レルノ事ナレハ敢テ審カニ
詳論スルヲ待タス

二葉

大概ニケ月前余 ジャパンノイニル新聞紙、持主及
ト著述人タルニ付キ太政官ノ一官真来テ余ニ
應接セシ時何事ニ限ラス政府ノ確定シ或ハ争ハ
議ス可キ事件アラハ閣下ニ報知ス可キノ掛合
アリ回テ今般横濱刊行ノ英文新聞紙ニ記スル
二句ヲ切抜キテ閣下ニ呈ス但シ第一号ハ日新
真事誌ト名クル日本新聞紙中ヨリ抄譯シタレ
者ナリト云ヒ第二号ハ ジャツパンヘラルド新聞
紙ニ此一事ヲ評論シタル文ナリ
此第一号ハ衆庶ノ大ニ注意シテ種々評論スル

所ニシテ又第二号ハ此一支ニ付キ衆庶ノ公論ヲ精密ニ記スル者ナリ

井上聞多氏ハ其位置モ高シ其退職前ノ役柄モ亦重大ノ者タルハ衆目ノ大ニ此人ニ注意スル所ニシテ斯ノ高貴ノ人ニ對シ司法省ヨリ第一号ノ文ニ記セル如キ刑ノ言渡ヲ為シタルハ何分信シ難キ所ナリ故ニ閣下ノ確報ヲ得テ此新聞ノ虚説タルヲ論スルヲ得ハ余ニ於テ大ニ快シトス一所ナリ但シ閣下ノ尊名ヲ新聞紙ニ載スルハ無益ニシテ害アル事ナレハ決シテ之ニ

載スルヲナカル可シ

前ニ智ヲ所ノ新聞ノ説ハ日本政府ノ為メ害ヲ為ス可キ事ナレハ余ハ勉メテ之ヲ防カンコトヲ欲ス

若シ閣下ノ御都合次第成ル可キ丈速ニ返翰ヲ贈リ賜々右新聞紙ノ説ノ虚ナル旨ヲ記スルヲ得ハ余ニ於テ感謝スル所ナリ恐惶敬白

千八百七十三年九月九日

横濱ニ於テ

ウ、ジ、ホウエル

呈
土方大内史閣下

乙
巳

九月九日附貴翰拜閱陳スレハ今般じマハシヘラルト新
 聞紙ニ記載セシ井上氏ニ關スル二條ヲ切抜キ御報知被
 下右ハ御信用難成所モ有之ニ付確報ヲ得候上新聞虚
 説タルヲ論スルヲ得ル大ニ快シトスル所ニシテ總テ日
 本政府ノ為メ害ヲナス可キ事ナレハ勉メテ之ヲ防カシ
 ムヲ欲スルトノ御厚意逐一兼知尤モ感謝ノ至ニ存シ健
 然ルニ右新聞紙ニ掲クル所ノ如キハ大ニ誤謬ニ涉ルモ
 ノアリ足下ノ是ヲ辨論シテ貴社新聞紙ニ掲クル實ニ世
 人ノ惑ヒヲ解クニ足ルモノアリ抑井上氏ノ曩キニ具進

セル所ノ奏議ハ其事ヲ舉ケ實ヲ指シ候所現實ト相違儀不少其申出不都合タルヲ以テ書面其儘差戻サレシル
トハ足下モ亦之ヲ悉スルナラン然ルニ井上氏ノ國律ヲ
犯セシニヨリ其譴ヲ受タルトハ左ニ

本年四月ノ布告中ニ在官ノ者官中ノ怠務等ハ瑣細ノ件
ト雖モ新聞紙ニ掲載致シ候儀不相成ト有之シヲ井上氏
在職中公布ノ旨ニ悖リ前文ノ奏議ヲ各種ノ新聞紙ニ掲
載シタル科雜犯律違令ノ重ニ擬シ徵役四十日ノ刑ニ處
セラルヘキヲ士族ノ身分ニ付禁錮四十日ノ刑ト為シ尚
又特命ヲ以テ其罪ヲ贖ハシメ金三圓ヲ収メラレタリ直

十ニ之ヲ申サハ徵役四十日ヲ禁錮四十日ノ贖罪金ニ換
ヘラレタルニテ新聞紙ニ評スル如ク奴役四十日ノ上更
ニ禁錮四十日ヲ申付ケ其罰ノ重複シタルニハ非サルナ
リ且ツ禁錮四十日ノ贖罪金ニナリタルハ同氏在職中ノ
勤勞モ有之ユヘ所謂特命ニ出タルナリ今其贖罪金ノ纒
カ三圓ニ止リタルヲ嘲り笑フト雖モ同氏ノ譴ヲ受ケシ
ル節ハ既ニ官ヲ解キ非役ノ身分ニ有之ユヘ非役以下一
例ノ贖罪金ヲ収メラレタルナリ試ニ思ヘ凡贖罪等ノ刑
ヲ受クルトハ金額ノ多寡ヲ論ヤズ實ニ其人ノ名譽ニ關
係スルモノ細小ニ非ス是則罰行ノ重シマ可キ所以ナリ

其三團ノ數ニ至テハ即今遵用スル所ノ改定新律ニ出テ
其條理素ヨリ基ツク所アリト雖氏是等ノ儀ハ一種法
律上ノ談ニ涉シハ今爰ニ論說ヲ費サス足下之ヲ熟思シ
ヘラレド新聞ノ疎漏ニ出テ其評スル所穩當ナラサル
ヲ知ラハ之ヲ辨駁シテ快トナスモ亦唯貴社ノ權ニアリ
テ妨ケナカル可シ紛忙中回答延引多派

明治六年十月三日

土方 大内史

ウシホウユル氏 貴下

右海書ちの火見の上用を留め被居候

（Faint vertical text, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. Some characters like '申出' and '書面' are visible.)

